第2部　各分野での震災後の取り組み
第11章　被災し／支援し／復興する宗教

藤野陽平

はじめに

沿岸のありとあらゆるものを呑み込んだ今回の津波では東北の被災3県でも多くの宗教施設が被災した。稲場圭信（大阪大学）と黒崎浩行（國學院大學）を中心に作成された宗教者災害救援マップ（https://sites.google.com/site/fbnerjmap/）には、東日本大震災で被災した宗教施設が地図上にまとめられており、その範囲と規模の大きさに改めて驚きを感じさせられる。また、民俗芸能や祭礼が地域の復興のシンボルとしてみなされることがあるが（高倉、滝澤編２０１４年等）、宮古では黒森神楽が1～3月に宿を取りながら県内沿岸をめぐる「巡行」が震災以降はとりやめになった（河北新報２０１１年４月４日付）[注(1)]。

また、被災直後から被災地へ多くの支援が寄せられたが、国内外からの宗教団体が陰に陽に関わっていたことも広く知られている（藤野・平野２０１２年）。宗教を基盤とした利他心に押し出された行動（稲場２０１１年）である。

震災から6年が経ち、これからは物的復興に加えて心的復興の必要性が強まってくる。阪神・淡路大震災では20年以上が経過したが、このところになってやっと当時のことを語れるようになった人がいたという。心の復興には根気強い長期間のケアが必要となる。もう6年ではなく、まだ6年である。医療従事者だけではなく、宗教関係者の果たすべき役割は小さくない。

残念なことに宗教関連の情報はテレビや新聞といったメディアで取り上げられる割合は小さい。後述する台湾の仏教系財団法人・仏教慈済基金会（慈済会）は、東北3県で50億円もの義援金を被災者に直接配布しているという（宮古では2億円程度）。これを伝えているのは『岩手日報』の8月31日付だけである（金子２０１１年）。こうした団体の多くが慈善活動を人に知らせることは好まず、隠しておく方を選ぶのであろうが、それにしても取り上げられ方が小さいと言わざるを得ない。そこで本章では、宮古市内の宗教の被災経験、支援活動、そして、どのように復興に向かっているのかを取り上げる。

1　宗教の被災状況と支援活動

A　エホバの証人

河南に位置するエホバの証人からは、ものみの塔聖書冊子協会広報室の**松永一樹さん**よりEメールを通じて情報を寄せていただいた。宮古のエホバの証人は宗教施設の被害はなかったものの、信者のうち津波による死者が1名、家屋の全壊が1棟、大規模半壊が1棟、軽微な被害が1棟であった。エホバの証人の災害救援に関する指針は以下の通りである。メールの内容をそのまま転記したい。

「エホバの証人は世界中の１３５以上の国や地域で生活する仲間の信者の為、必要に応じ災害時の救援活動を展開して参りました。それには金銭的な援助は勿論ですが、物的な支援や復興に関する支援の活動が含まれております。これらの救援活動の根幹にある指針として３つの点を上げる事ができます。まず1番目の点として、救援活動が私共の宗教信条を実践する機会とみなしている事です。このような機会が、私どもの学ぶ神の教えを飾るものとなり、学んでいる事を実践するものとなると確信しております。それで、仲間の信者については勿論のことですが、必要に応じ近隣の住民の皆さんにも支援の手を差し伸べております。２番目の点として、仲間の信者の必要を満たすことをクリスチャンとしての務めと理解しておりますので、どのような災害の場合についても、迅速な救援活動を展開しております。実際に、この震災の救援活動に際しては国内だけでなく、海外からも仲間の信者が

注(1)　なお、震災後初めての公演は２０１１年6月25日、避難所と仮設住宅団地になっているグリーンピア三陸みやこでのものである（広報：１４３号：10頁）。

救援の為に駆けつけ、宮城県を含む広い範囲で活動いたしました。米国では、この救援に関する働き手を募ったところ、自費で援助に出向く事を申し出た者が６００人近くおりました。３番目の点として、仲間の信者が通常の生活に戻る事を助ける為、具体的な救援活動が展開されて参りました。今回の震災に関連して、信者の中には生活必需品の全てを津波で流され、着のみ着のまま助かった方も大勢おりました。これらの皆さんが、１日も早く通常の生活に戻りクリスチャンとしての活動に預かれるよう、具体的な支援が検討され細かな分野に至るまでの援助がなされました。」

以上の指針を受けて宮古における活動の概要は以下の通りである。震災直後から盛岡市に救援に関する「キーステーション」を設置し、岩手県内の被災状況の調査と支援活動を実施した。３日後には代表者と地域の担当者が被災地入りし、安否確認と物資の配布を始めた。その後、岩手・救援委員会が盛岡市に組織され、安否確認、援助活動を行った。宮古市のエホバの証人信者の58世帯に対して、車３台も含む全国から２千品目以上の支援物資が配られ、３回の簡易な家屋の修繕も行われた。その他行政のサービスに関する情報の伝達、引っ越しや清掃の手伝い、癒しを目的とした理容・美容のサービス、内陸の温泉へ招待しマッサージ等の提供も行った。

B　創価学会

創価学会のみなさんには２０１３年10月29日に、創価学会宮古平和会館（宮古市松山）にて座談会方式でインタビューを行った。参加者は創価学会第三岩手総県総県長のＹさん、聖教新聞配達員のＴさん、Ｈ１さん、Ｈ２さん、Ｓさん、Ｋ１さん、Ｋ２さん、Ｏ１さん、Ｏ２さん、Ｍさん、Ｂさんの11名で、創価学会広報室の方にも同席いただいた。なお、Ｈ１さんとＨ２さんは親子、Ｋ１さんとＫ２さん、Ｏ１さんとＯ２さんは夫婦である。

・宮古平和会館の概要

２００６年２月に落成した宮古平和会館は宮古太陽県（田野畑、岩泉、宮古、山田）の中心会館となっている。宮古太陽県は約９００世帯、人数では１千８００人程の学会員がいる。それまでは磯鶏に今の３分の１程度の小さい会館（宮古会館）があったが、手狭になり宮古平和会館が建てられた。宮古会館は１９８５年に落成した。それ以前には個人宅などに集まっていた。

・震災直後の状況

震災直後には数人の会員が平和会館に避難してきた。教団からは14日に支援物資が平和会館へ届き始めた。様々なルートがあったが、北海道からのものが多かった。創価学会には全国に「方面」という単位があり、それに基づき岩手には北海道から、宮城、福島には関西からといった支援ルートを本部が決めた。さらに岩手県内では岩手文化会館に設置された「災害対策本部」が、状況に合わせてどの地域に何を持っていくかを調整していた。北海道はこれまで様々な災害を経験したノウハウがあり、13日には北海道を出発して、14日に盛岡、宮古には15日に到着した。毎週７トントラックと２トントラックの２台で主に食料品等の物資が運び込まれた。

宮古に到着した物資はＨ２さんを中心に避難所や家にいた人に毎日のように配布された。車もガソリンも不足していたので、少人数で行った。北海道からは物資だけではなく応援職員も来てくれたのだが、ガソリンの入手が難しく、当初は身動きがとりづらかった。

北海道からの応援職員には平和会館を宿泊所として使用してもらい、物資の分配や会員の安否確認などを担当してもらった。つねに５人ほどは県外から応援に来てくれた。北海道が最も多いがそれ以外にも関東など各地から人が駆けつけた。

・被災状況

平和会館の被害は停電と断水のみで、電気の復旧は１週間以内、水

はもう少しかかった。会員は太陽県全体で死亡、行方不明者が若干名（非公開）、全壊１２０世帯、半壊30世帯、車は30台以上流された。

・聖教新聞

震災後しばらく聖教新聞が配れなかった。新聞自体は毎日来ていたのだが、田老などまで配布できるようになるには時間がかかった。３月16日に池田大作名誉会長からメッセージ[注(2)]があり会員は大いに励まされた。この日の新聞は８日後には田老に届けられた。

配達員のＴさんによれば、道路は使えないので三陸鉄道の線路を使って田老まで移動したという。前日まであった家が無くなっていて普通

注(2) 参考「きょう３・16　池田大作名誉会長がメッセージ　勇気を持て希望を持て」
Seikyo online より　（２０１４年３月19日確認）
http://www.seikyoonline.jp/news/headline/2011/03/11950 39_2463.html

いかなる苦難も「心の財」は壊せない断じて負けるな勇気を持て希望を持て

このたびの東日本大震災に際し、被災なされた皆様方に、重ねて心よりお見舞いを申し上げます。

大地震・大津波より６日目。安否を確認できない方々も多数おられます。

皆様方の疲労も、さぞかし深いことでしょう。体調を崩されぬよう、そして十方の仏菩薩から守りに護られますように、私も妻も、全国の同志も、世界の同志も、一心不乱に題目を送っております。

わが身をなげうって救援・支援に尽力くださっている役員の方々、さらに地域の依怙依託の皆様、誠に誠にありがとうございます。

「一国の王とならむよりも、一人の人を救済するは大なる事業なり」（『啄木全集　第７巻』筑摩書房）とは、東北が生んだ青年詩人・石川啄木の叫びでありました。

私は最大の敬意と感謝を表します。

御書には、災害に遭っても「心を壊る能わず（＝心は壊せない）」（65頁）と厳然と示されています。

「心の財」だけは絶対に壊されません。

いかなる苦難も、永遠に幸福になるための試練であります。すべてを断固と「変毒為薬」できるのが、この仏法であり、信心であります。

また、逝去なされたご親族やご友人の追善回向を懇ろに行わせていただいております。本当に残念でなりませんが、生命は永遠であり、生死を超えて題目で結ばれています。

妙法に連なる故人は必ず諸天に擁護されて成仏され、すぐに近くに還ってこられます。これが仏法の方程式であります。

日蓮大聖人の御在世にも「前代未聞」と言われる正嘉の大地震がありました。人々の悲嘆に胸を痛められ、大難の連続の中、「立正安国」という正義と平和の旗を厳として打ち立ててくださったのであります。

大聖人は、「大悪をこ（起）れば大善きたる」（御書１３００頁）と御断言になられました。

きょう「３・16」は、恩師・戸田城聖先生が、この世から一切の不幸と悲惨を無くすために、「広宣流布」を後継の青年に託された日であります。一段と強く広宣流布を誓願し、共々に励まし合い、支え合いながら、この大災難を乗り越え、勝ち越えてまいりたい。

断じて負けるな！　勇気を持て！　希望を持て！　と祈り叫んで、私のメッセージとさせていただきます。

の心理状態ではなかった。しかし待っている人がいると思い、使命感を持って配達したという。Tさんは自宅が聖教新聞の販売店で、半壊した。そこで震災当初、平和会館を使って配達したという。

・心のケア

会員には激励、励ましを行うが、ケースバイケースの対応をしている。

・慰霊

毎年3月11日に平和会館で追善勤行会を行う。身近な肉親や親戚を亡くした方を中心に、多くの会員が参加している。また、個別に告別式も行った。

・個別の体験

以下、座談会形式でみなさんの体験を語ってもらった。

Mさん

普段は聞かないのだが、震災当日はたまたまNHKのラジオを聞いていた。携帯電話よりも先にラジオが津波を知らせてくれた。3時には大津波と聞いて私が田老出身だからだろうか、これは大変だと思った。小さいころから津波の恐ろしさを叩き込まれていて、大きな津波がやってくることはわかっていた。行ってはいけないとわかっていたが、会社に行ってみんなで一緒に逃げることにした。

1週間ほど親戚の家にいて、その後は避難所に、今は仮設住宅に暮らしている。田老の407世帯がグリーンピアに、8割は入っている。そのうち6から7割は他の地域に移っていった。私も仕事をしているので、生活は元に戻りつつあるが、仮設の人と話をするとまだまだ乗り越えられない部分があると感じている。田老は何度も津波にあっているが、それに負けないことが大切だ。津波にあったおかげで、生活の面でも信仰の面でも、人間にとって大切なものが何なのかわかったような気がする。信仰のおかげで人を励ますことができ、自分も励まされる。学会員でなければショックで自己の内面に閉じこもっているような生活を送っていたに違いない。

Sさん

地震が来たときは仕事中だった。電気が消え、情報が無かった。カーナビのテレビを点けたところ、魚市場の映像が流れてきた。会社は宮町にあり、土手に上がって津波を見ていた。家は金浜にあるので、会社を早退した。家には帰れなかったので、山の方にある実家に帰宅した。実家では停電していたので情報が無く、のんびりしている様子に見えた。

おばあさんが独りでいたので、助けてあげたのだが、そのすぐ後に、H2さん、K2さんに会うことができた。そこで、K1、K2さんのお宅に泊めてもらった。K2さんは内陸の出身なので津波の知識はあったものの、体験していなかったのでよくわかっていなかった。

おばあさんと一緒に逃げた。海を見ていたら、津波が堤防を超えてきて、家が流されるのを見た。H2さんに出会ったら、また涙が出てきた。花輪の伝承館に避難したのだが、ここにきていたのはほとんど金浜の人だった。

花輪の人にはお世話になった。伝承館には畳もあったので年寄りにはとてもよかった。座布団を並べてそこで寝ることができた。ストーブもつけてくれた。体育館に比べれば恵まれていた方だろう。

最初は必死だったので、気が紛れていたが、時が経つにつれてだんだんつらくなってくる。今は津波の映像を見たくもない。

H2さん

地震の後、父の家に行ってみたが、出会えなかった。そこで、避難所へ行ったら父と会えたので、平和会館へ移動した。その時には15人くらい、会員もそうでない人も避難しに来ていた。

14日から物資の配布をした。このころには道路が通れるようになっていて、重茂までいくことができた。重茂まで行ってみると創価学会の男子部員が亡くなったと聞いた。一般の避難所に物資の配布をしていると「創価学会のものはいらない」と断られることもあった。そのうち、電池のリクエストなどを受けるようになり、応えていると「創

価学会はすごい」と褒められるようになり、徐々に「学会さん、ありがとう」という声が聞こえてきた。

O1さん

高校で事務長をしているのだが、当時学校の外にいたので、すぐに学校に戻った。もともと大事なものは校舎の４階にあげていたので無事だった。津波が堤防を超えたら危なかったのだが、直前で止まってくれた。その様子を屋上で見ていた。

生徒は４７０から４８０人ほどで、近所の人も２００人ほど避難してきた。最初は保護者が迎えに来ても生徒を帰さないという方針をとり、安全が確認できてから保護者が来れば帰すことにした。しかし、帰れない生徒もいたので職員も一緒に宿泊した。O1さんも5日間学校に泊まったという。宮古市内は12日には電気が復旧、ガスと水道は最初から使うことができたので、女性職員が自宅から食料を持ってきて、自分たちで自炊した。

被災している人が激励されるべきなのに、むしろ他の被災者を激励していると感じることがあった。

K1さん

当日埼玉に出張していて、数日間家族と連絡が取れず安否がわかるまでとてもつらかった。すぐに戻りたかったが、ガソリンもないし、新幹線も動いていない。3日後に連絡がついたときには、歩いて帰ろうかとすら思った。復旧するまで待ちきれず、新潟、秋田を経由して妹の軽トラックを借りて戻ってきた。

戻る前から家がダメだと聞いてはいた。それでも実際に目の当たりにするまでは淡い期待をしていた。家族の命が一番の願いだった。無事とわかった時には、目の前が開けたような気分だった。流されてしまった家を見た時にはもちろんがっかりしたのだが、家族がいるだけで今は幸せだと思っている。家族の全員が無事だったということは、本当に希望に繋がっている。

O2さん

戦争は経験していないが、こういうことなのかなと感じた。つらかったのだが、きちんと知っておかないといけないと思い、目に焼き付けるようにした。当日は、キャトルにいた。すごい揺れで、これは津波が来ると直感した。45号は通れなくなっていたので、バイパスで移動し、平和会館の前まで来たので、会館に入った。3時に交代の人が来る予定だったが、来られないならば無理をしなくてよいと伝えた。

家は津軽石駅の近く。家に帰ることはできなかったので、娘の務めている老人ホームへ行き、そこで宿泊した。余震が何度も襲ってきた。翌日、家に帰ることができた。家はあったが、ひどい状態で、４日間ほど会員さんのお宅に泊めてもらった。自分にとって一番安心できるところは会員さんのお宅だった。5日後には親戚の家へ。そこで2日間、担当している地域の会員の安否確認をした。なるべく早く安否確認をということだった。歩いていかなくてはたどり着けないところも多く、たくさんはできなかった。

H1さん

学会員、とくにリーダーになっているような人は責任感が強いと感じる。

Yさん

震災の有無にかかわらず、普段から会員の訪問などをしたり、会合で顔を合わせたりしている。普段からこうした交流をしているので、災害時に責任感がでる。こういうことが自然にできることが、「目の前の一人を大切にする」という池田先生の教えの実践である。被災者なので支援を待っていればいいのだが、あの人はどうしているだろうかと、他人のことを思いめぐらすことが自然にできていた。

O2さん

座談会は5月に再開された。震災後、初めて再会した時には「みんな学会員でよかったね」というのが、共通した感想だった。みんなが守られていたのだ。いざというときにこういう感想をもつことができた。みなさんの一言一言がすごい座談会だった。「学会員ってすごいな、すばらしいな」と思った。この時のことは聖教新聞にも掲載された。だから自分は被災者だとは思っていない。もっとひどい目にあった人

たちのために何ができるかを考えている。

Yさん

みなさん忙しい中毎日いろいろな活動をしている。それを続けるのは大変なこと。盆暮れ正月だけではない活動だからこそ自発的に一人一人が動けた。これは創価学会の強みである。

H1さん

家庭訪問で訪れた会員の家に会員ではない人が遊びに来ていた。会員以外との交流も行っていた。特に婦人部の活躍は目覚ましいものがあった。

Bさん

津波が田老の堤防を超えてくるとは思っていなかった。公明党の市会議員（二戸）が震災翌日に来てくれて、やるじゃないかと感じた。津波のおかげで仲良くなれたということもある。田老の皆さんは比較的冷静だ。人に会うと元気付けられる。座談会に来ると笑顔になる。震災前には誘われたら行くという受け身の姿勢だったが、震災後はみんなに会いたい、笑顔が見たいという気持ちで参加している。みんな元気でやる気十分。田老近くの会員さんが場所を貸してくれて週に1回座談会を行っている。今でも愛媛の学会員からいろいろな支援をもらっている。

Mさん

宮古平和会館が創価学会の本部になったような感じがした。会長や婦人部長、普段なら東京に行っても身近ではなかなか会うことができないような人たちが来てくれた。たくさんの人に来てもらってとてもうれしかった。心のつながりが一番うれしい。

C　長根寺（ちょうこんじ）

市内長根（ながね）の長根寺（ちょうこんじ）は真言宗智山派（ちざんは）の寺院で、檀家は380軒。真言宗智山派岩手教区青年会（以下、岩手智青）の会長を務める住職の**武田秀山**（たけだしゅうざん）**さん**（1963年生）に、2014年10月30日にお話を伺った。岩手には真言宗の寺院は少なく、智山派38か寺と豊山派数か寺のみで、両派をあわせても50か寺ほどしかない。

今回の震災津波では、田老地区の15人はじめ20人もの檀家の方が亡くなっている。発災直後は、避難所として近所の人たち20人ほどが避難して来ていた。長根地区は津波の被害はないので、余震が落ち着けば帰宅できた。水道は少し時間がかかったが、ガスはプロパンで問題なく、電気は翌日に復旧した。1～2日で市内に正式な避難所ができたので、被災した市民たちはそれぞれ最寄の避難所に入った。

武田さんは、今後の檀家のケアについてはやるべきことがたくさんあると感じているが、今のところは被災者の話を聴くことに専念しているという。1年目のお盆では、棚経をやってほしいという家と、お坊さんを見たくないという家の2つに分かれた。そこで、その年は来てほしいというところだけに行くことにした。

「特別なことは何もしていない。何かを用意してどうするというわけでもない。こういう時の務めは、癒せるのならば色々な言葉をもちいることだろう。しかし、それですぐに元に戻るということはない。時間がかかる。田老に、私と同じ年の人が亡くなったお宅がある。そこのお宅の両親は立ち直れていない。本人たちも体がわるいので、できるだけ顔を見せて様子を確かめるようにしているが、そんなことしかできない。『頑張れ』とは言わない。『頑張るな』と言っている」という。

こうした長根寺だが、いくつか注目される取組みや行事を行っている。

・真言宗派の活動への参画

第1に、京都の醍醐寺が行った桜の植樹と柴燈護摩供養への協力である。京都の醍醐寺の人々が毎年宮古へ来ているが、長根寺はその活動に対して全面的に協力している。

震災一周忌の時（2012年3月）には、醍醐派の僧侶により田老で鎮魂の法会が行われた。当日は水分の多い雪交じりの冷たい雨の中だった。岩手智青と共同で、宮古の河川敷（宮古高校のグラウンド）でも護摩供養が行われた。この時には醍醐派だけではなくタイの僧侶も来

てくれていた。タイの僧侶は自国の法衣のままで、懸命に祈ってくれた。3・11の日はとても寒かったが、この日もそれを思わせる寒さだった。タイの僧侶が肌を出しながら寒さをものともせずに一心に拝んでいる姿を見て、武田さんは身が引き締まる思いがしたという。

2012年5月27日にも、「命への感謝・未来への夢」と題して、醍醐寺の人々が植樹と柴燈護摩を行った。仲田順和座主以下30余名の京都からの僧侶らが、午前中にはグリーンピア三陸みやこの敷地内、市の田老総合事務所前、浄土ヶ浜の臼木山の3か所に8本の「醍醐の桜」を植樹し、犠牲者の鎮魂と被災地の復興を祈った。この醍醐の桜は、1596年に発生した慶長伏見地震の2年後に、豊臣秀吉によって催された、歴史に名高い「醍醐の花見」の桜の子孫（「太閤しだれ桜」と称される）である。午後には浄土ヶ浜で、震災犠牲者の鎮魂と被災地の復興を祈念し、柴燈護摩が行われた。（『みやこわが町』403号：18～19頁、宮古市広報163号：13頁）

2014年3月9日には醍醐寺の桜を植樹する「京の杜プロジェクト　桜がつなぐ架け橋」が崎山小学校で行われ、仲田順和座主や京都の醍醐小学校の児童も参加した。醍醐小学校は、2013年3月に醍醐寺から寄贈された2本の桜の苗木を大切に育てて1・6㍍まで成長させ、この双子桜の1本を崎山小学校に贈ったのである。（『みやこわが町』424号：19頁、宮古市広報207号：1～2頁）

・超宗派の慰霊

第2に、超宗派の動きを紹介したい。仏教の宗派を超えた慰霊の供養も、長根寺の武田さんが音頭を取って行われた。2013年3月11日には全国日蓮宗青年会による「東日本大震災三回忌慰霊唱題行脚」が、午後1時から田老の巨大防潮堤で行われた。

また、岩手智青による「東日本大震災復興祈願柴燈大護摩供法要」が、田老港みなと公園で午後2時から行われ、地区民など300名ほどが参加した。

真言宗智山派の大本山である高尾山薬王院と、田老の曹洞宗常運寺との共催で行われたもので、佐藤秀仁大先達が薬王院貫主大山隆玄大僧正の名代で来宮した。山伏50名ほどがたろう観光ホテル前で犠牲者の精霊の祓い清めをした後、みなと公園で柴燈護摩供養を行った。この時に用いられた火は、阪神淡路大震災復興の火を、前年2012年に真言宗の全国青年会が神戸市から福島県いわき市まで、この年に岩手智青がさらに田老まで、ともに徒歩によって運ばれたものである。代表を務めた武田さんは、「多くの人に集まっていただき盛大な供養ができた。また、被災地を応援するために、全国の仲間が集まってくれたことに感謝し、1日も早いふるさとの復興を願いたい」と語った（『みやこわが町』412号：18～29頁）。その後常運寺から、仮設店舗のコンビニエンスストア、たろう観光ホテルを経て、みなと公園へ、「行道」という練り歩きも行われた。この日もとても寒くて風の強い日だったが、僧侶たちだけではなく檀家やそれ以外の市民も数多く集まっていた。

2014年の3年目には、有志で宮古港出崎埠頭の魚市場で、夕方6時から「夢あかり」と供養を行った。岩手智青と宮古の人達との協力で行ったもので、20人ほどの参加があった。

2014年の夏には鎮魂の供養をしている10人ほどの日蓮宗の僧侶たちが、徒歩で宮古へやってきたので、長根寺に泊まってもらったという。「ゆっくり話はしなかったので細かいことはわからないが、1泊していった。身なりも食も質素で、お粥みたいなものを食べるか食べないかという感じで、頭が下がるほど真剣に被災地に向き合ってくれていた」と武田さんは振り返る。

武田さんはこうした活動に対して、「超宗派という心構えでやるようにしていた。一周忌の時には、そのために曹洞宗とも協力したし、他の宗派の人達も来ていただいた。私は真言宗のスタイルで旗振りの役をしていたものの、超宗派の活動だったと思っている」と語る。

・オテライブ

第3に、従来の寺と仏教のありかたにとらわれず、寺院を開放する動きを紹介したい。長根寺では、震災前から「オテライブ」と銘打って、

送り盆のときに本堂を一般開放し、音楽や芸能で施餓鬼供養をするイベントを行っている（主催はオテライブ実行委員会）。武田さんは『みやこわが町』の取材に対して、「本来、寺は文化を発信する場所。葬儀や供養だけでなく、寺の機能をもっと広げていきたい」と答え、本来寺院がもっていた機能を掘り起こして拡げていきたいと語っている。このイベントは、震災以降も続けられている。

２０１２年９月２日の第４回オテライブでは、アコースティックグループの「リサトキヨフミ」、宮古の創作舞踊家中川太治さんと、琴の大澤信子さんによる創作舞踊、宮古弁フォークの「うにまる」のステージが行われた。入場無料で、来場者の芳志は宮古市社会福祉協議会へ寄付された（『みやこわが町』４０６号：42頁）。

２０１３年の９月１日の第５回オテライブでは、震災犠牲者の黙祷の後、団塊世代のテケテケバンド「爺ートルズ」、津軽三味線の「みやこ三絃会」、宮古弁バンドの「うにまる」が８時過ぎまで白熱の演奏を繰り広げた（『みやこわが町』４１８号：40～41頁）[注(3)]。

２０１４年の８月31日の第６回オテライブでは、手品ショーを交えた「フナダバンド」（山田町）、津軽三味線の「みやこ三絃会」、宮古弁パフォーマンスの「うにまる」の３組が、「夢あかり」が照らす境内で、和やかなショーと迫力ある演奏を繰り広げた（『みやこわが町』４３０号：40～41頁）。

D　天理教

天理教の教会は宮古市内に11か所あるが、ここでは愛宕の宮古分教会と山口の花宮古分教会の状況を報告する。天理教の組織は親子関係の直属系統、教区支部の地域系統にわかれるが、それぞれ別のものではなく、縦糸横糸のような組織形態になっている。岩手教区や、宮古支部の地域ネットワーク以外にも直属系統のネットワークにより縦と横の関係を駆使し、連動させた支援が行われた。

D・1、宮古分教会

７代目の教会長、**高橋邦之さん**（47歳）から２０１３年９月19日にお話を伺った。教会建物への被害はなかったが、信者数名が亡くなり、多くの信者宅が被災した。愛宕に位置する宮古分教会の近所は当初道路が寸断され、多くのがれきが押し寄せた。

高橋さんが消防団員として終日活動する中、家族が中心となり、教会としてまず震災翌日より避難所と近隣住民におにぎり等の食料支援を行い、次いで信者の安否確認を行った。通信手段がなかったので、実際に一軒一軒歩いて確認し、３日目になって全員の確認ができた。それぞれ状況が違ったので、食べ物に困っていればおにぎりを届けるなど、必要に応じて支援を行った。

また、直属や教区から届いた支援物資の配布、複数回に渡る炊き出しや和太鼓、弦楽演奏の慰問演奏会などの地域支援活動も多岐に渡った。

更に、町内会長さん達から宗教団体としての活動の許可を得て、県内外から集まった者達が、愛宕地区と築地地区で行った側溝のがれきと土砂の撤去掃除は、土嚢袋で２千枚を超える作業となった。なお、同年６月には愛宕小学校において、光岸地地区の善林寺と共同で炊き出しや物資配布等の被災者支援も行った。天理教には災害救援ひのきしん隊という社会貢献を担う組織もあるが、上記のように、それとは別の宮古分教会主体の活動となった。

・心のケア

震災後特別なことはしていないが、天理教の教えが書かれたチラシ

注(3) 長根寺以外にも似たようなイベントとして「お坊さんコンサート＆みに炊き出しin善林寺」が善林寺の主催で２０１４年６月15日に行われた。全国の寺院で活動中の僧侶コンビによる、カントリー・ポップス・ロックと笑いを融合させたコンサートと、震災当初から活動中の炊き出しグループによる炊き出しが行われた（『みやこわが町』４２６号）。

を定期的に地域に配布したり、事ある毎に教えに則った活動や行動、またお話をすることで、被災者の心のケアに努めている。

・慰霊

震災後最初の４月の月次祭（月次祭は毎月３日）以来、かかさず祭文の文中に、１日も早い地域の復興と人々の救済に関する文言を入れて、月々祈願している。また、宮古市内で犠牲になられた方々全員の名前を書いたものを祖霊様に供え、犠牲になられた方々のみたまを日々慰霊し、現在も続けている。

Ｄ-２、花宮古分教会

２０１３年９月20日に４代目の教会長で天理教の宮古地区の支部長でもある**小野寺信一さん**（63歳）よりお話を伺った。花宮古分教会は信徒約１２０名で、親教会は花巻教会、その親教会は三重島ヶ原大教会となる。山口に位置する花宮古分教会はかなりゆれたが、地盤が固いので被害はなかったものの、信徒の５～６名が亡くなっている。ただし、教会に来ていない人や宮古を離れた人もいるので、まだ、全員の安否確認ができているわけではない。

被災していない花宮古教会は、支援活動に来た小団体を受け入れて宿泊施設とした。そのほか花宮古分教会でも個別に活動した。20～60代の男女の信者がヘドロかきや、押し入れのものを出して、洗って、しまうなどの活動をした。ただし、当時は忙しく何をしたかという記録は残していない。後片付けは終わったが、これからは人が集まることが大切だと思っている。東京のとある分教会は数回車でやってきて、野菜を持ってきてくれた。それを被災した教会に持って行って一般の人にも配るようにした。水や米もたくさん届いた。

・心のケア

小野寺さんはこれからが大切だと思っているのだが、どうやって元気づけるかが問題だと語る。90歳くらいの信徒が、もう死にたいから早く死なせてくださいと祈ってほしいという人もいたという。何度も繰り返し、津波の映像をみていると、そういう気持ちになってしまう人もいる。お年寄りはトラウマになる。「死にたい」という人に対してどうしていいかわからない。小野寺さんはこうも語る。

「何もかける言葉がないことがある。私などが言っても慰めの言葉にならない。最近になってようやく当時のことを話せるようになってきた人も少なくない。こちらが話すのではなく、聞いてあげる。否定したりするのではなく、『そうだねー』とだまって聞いている方がいい。90歳の人に60代の私にはかける言葉がない、どんなにいい言葉でもしかたがない。『あなたの気持ちわかります』なんて言われたくない。宮古分教会の人が花宮古分教会へ避難してきたことがある。花宮古分教会は被災していないので、その人は避難所の方がみんな被災したので差がなくてよいと言っていた。同じ天理教の中でも被災しているかいないかで壁ができてしまった。わかったような振りをして慰めの言葉をかけるのはよくない。聞いてあげることの方が大切。言葉をかけるのではなく、会いに行ってあげる。聞いてあげることのもつ、励ましがある。天理教全体でそういった話がでていた。寄り添うことの大切さ。大変な経験をされた人の話を黙って聞いてあげる。返すのは『大変だったねー』の一言だけ。」

また、話を聞くことで相手の心に傷を負わせてしまう可能性がある事も危惧している。被災した人から無理に話を聞くことは心の傷をえぐることがあり、相手がどんな人かよく考えて、言葉を選んで話をしている。悪いことを言ったつもりはなくても相手の心に傷をつけてしまうことがあるという。

「手助けはいいのだが、接し方はもっと気を付けるべき。人によって受け取り方は異なる。話してもらいたくないことも多い。励ましているつもりでも逆効果のことも多い。被災していない人は被災した人の気持ちはわからない。ボランティアに来たりして直接被災した人と接した人は、こうしたことを感じ取った人もいるようだが、テレビを見ただけで話だけ知っている人には、こうしたことを理解するのは難し

いだろう。」

・心境の変化

心境の変化について、小野寺さんはいい面もあったという風に捉えているようだ。例えば、今まで父が母を虐待しているような家庭が、震災を通してまとまったというようなことや、子供たちが今までは当たり前の普通の生活がどんなに貴重かわからなかったが、これに気付いたというようなことである。一方で酒におぼれてしまったという人もいるので、さまざまであるという。

・心霊体験

海から声が聞こえるという信者さんがいた。真っ暗な海から「おーい」「むかえにきてくれー」と聞こえたという。こうしたことに対しても、聞いてあげるというスタンスで、「そうなんですか」という方法しかない。素直に受け入れてあげて、反発してはいけない。そういう姿勢しかない。こういう声が聞こえるのは心が揺れているということ。それに対して宗教的な説明もしない。ああしなさい、こうしなさいと指示すると、相手を翻弄してしまう。かえって心を乱してしまいかねない。だんだん落ち着いてきてからでいいだろう。

夜中に思い出して大騒ぎする子供やお年寄りがいる。それに対して叱ったりするのではなく、抱きしめてあげることの方がいい。言葉ではない。

・慰霊

支部として２０１２年3月9日に釜石の旅館、宝来館で慰霊祭を行った。宝来館のトイレをかりて、袴に着替えた。岩手教区主催で、教区長が執り行った。寒い日だったが、３００人ほどの参加者があった。多くは天理教徒だが、宝来館関係者、地元の人の参加もあった。小野寺さんの親の時代の１９３３年（昭和８年）の津波の時に、天理教の青年会は死体の回収をし、並べて調べる仕事を請け負った。田老の布教所の跡にアンパン34個を供えて、その後それをみんなに配ったことがあるが、これに倣って行った。

神様に向かって輪廻に相当する「でなおし」された方たちを守ってくれるように、1日も早く生まれ変わって、家族を助けてくれるように、生まれ変わってまた縁を結んで「ようきぐらし」、たがいに助けあえるように祈っているという。

E　宮古コミュニティ・チャーチ

舘合町の宮古コミュニティ・チャーチ（以下、コミュニティ・チャーチ）は、大きな教団に属さない単立教会だが、キリスト教界のネットワークを通じ、国内のみならず世界規模でボランティアを受け入れ、現在も活発に活動している。福島県いわき市出身で、宮古に赴任して26年になる牧師の**岩塚和男さん**（１９５８年生）から、２０１５年5月4日に話を伺った。

コミュニティ・チャーチは、38年前にノルウェーの東洋福音宣教会が設立した教会で、プロテスタントの福音派に位置づけられる。信徒は25名ほどで、礼拝は毎週日曜日10時30分から行い、以前は宮古市内、山田町の5か所で家庭集会も行っていた。震災前には木曜日に祈祷会をしていたのだが、震災後は平日にボランティアを受け入れており、不定期になり、日曜日の礼拝後になった。徐々に落ち着いてきたので今後は元に戻していきたいという。

・震災当初

当日、岩塚さんは教会にいたのだが、避難警告が出たので牧師夫人と2人で向かいの山に避難した。そのために津波は見ていないが、教会から50㍍先の側溝から遡上した津波が噴き出すのを目にしたという。教会の建物は壁に小さなひびが入った程度で大きな被害はなかった。ライフラインの復旧も、市内では早い地域であった。震災の中でも礼拝は一度も休むことなく続けられたという。震災直後の日曜礼拝は教会でしたが、燃料が乏しく寒いので、その後の2回は薪ストーブのある近くの教会員宅で礼拝を行った。3月13日の礼拝後、教会員の安否

確認をして市内を回った。信徒の被災状況は家庭集会に参加する80代後半の女性宅が床下浸水し、客員で公務員の人の官舎が流されたが本人は無事だった。

ボランティアが来るようになると、共に礼拝に参加するようになり、礼拝堂が満員になることもあり、海外から来られる人も多かったので各国語に通訳されていた。

・支援活動の開始とボランティアの受け入れ

会員にも教会の建物にも大きな被害はなかったので、すぐに支援活動に取り掛かる事ができ、1週間後には避難所訪問をはじめた。教会員にカイロプラティックができる人がいて、その人と一緒に市内の避難所をまわり、岩塚さんは受付と傾聴を担当した。

間もなく世界中のプロテスタント教会からボランティアが派遣されて来るようになる。「3・11いわて教会ネットワーク（以下NW）」が、震災2週間後の3月24日に立ち上げられた。派遣される人や送られてくる物資の窓口となり、振り分けなどをおこなったので、沿岸の教会は振り回されることなくスムーズに活動ができた。その他、クラッシュジャパンの遠野ベースを経由して来る人達など、直接宮古コミュニティ・チャーチに来る人達もいた。ホクミン（北海道クリスチャン宣教ネットワーク http://www.hocmin.net/）は、NWを通じて宮古を中心に1年半ほど、ほぼ毎週のように65回チームを派遣し続けた。元々北海道内の災害に対応するという目的で設立されたネットワークなのだが、東日本大震災の被災地への派遣を即断した。各地から次々と来るボランティアの拠点および宿泊のために、黒森町の一軒家（ホクミンハウス）を借り、現地に常駐するスタッフも派遣してくれた。

日本国内の宣教師たち（特にアメリカ人）は、車に物資を積めるだけ積んでいち早く駆けつけ、必要なものは取ってくださいという形で配布していた。震災直後の機動力という点では、こうした宣教師たち、また前述のホクミンの対応が迅速だったという。ユナイテッド・プロジェクト（UP）という千葉のNPO法人も、震災直後から支援に着手し、2011年夏からは現地スタッフを派遣し、2015年6月まで支援を続けた。日本キリスト合同教会（7教会ほどの教団 http://www.godo.or.jp/）は、2011年9月から毎月チームを派遣している。また毎月2週間滞在する現地スタッフも派遣してくれている。シンガポールのEPJM（長老派の10教会）は、2013年3月から毎月ボランティアを送っている。毎月10日程度活動するが、最初の頃は2週間ほど活動していた。他にも、札幌のグレースコミュニティ、聖契教団（特にIBF、長岡教会）、長野の戸倉キリスト教会、同盟教団の信州チーム、大阪のチャペルこひつじ、岡山の聖約教団などが年に数回支援チームを派遣し続けている。

このように、EPJMからは毎月2週間、合同教会は毎月1週間ほどチームが派遣され、その他の団体からも来るので、コミュニティ・チャーチには、ほぼ毎週途切れることなくボランティアが来ていることになる。そうした国内外のからのボランティアがいたので、支援活動を現在まで続けることができた。

・宮古の現地体制

現在、牧師1人、イギリス人宣教師（ハープ奏者）1人、教会員2人、合同教会から毎月2週間派遣の1人の計5人のスタッフで、国内外から絶えず訪れるボランティアを受け入れている。宿舎はホクミンが借りていたところをUPが引き継ぎ、資金を出して借り続けてくれている。6畳が3部屋、8畳が1部屋、台所の間取りで、車も4、5台はとめられる。ここを拠点に北は田老から南は山田まで出かけていく。

・支援活動の内容

震災直後は、集まったボランティアを、がれきの撤去と学童の子供たちのケアに派遣した。また炊き出しも各地で行った。当時のボランティアについて岩塚さんはこう振り返る。

「がれきの撤去に行った人達は、肉体の疲労はあってもがれきを取り除いた達成感を抱いて帰ってくる。一方、学童に行った人達は、子供

達の内に秘めたストレスを直接ぶつけられて、精神的にも肉体的にも疲労した顔をして帰ってくる。ともすると大人は子供たちがおとなしくしているので、大丈夫と思っている人もいるようだが、そうではなく、早めにケアをすることが大切だと思わされた。ボランティアが真剣に関わり続けることにより、徐々に子供達の顔が明るくなってきた。

4年が過ぎ、災害復興公営住宅に引っ越す人達が増えていて、再び周囲が動きはじめたことにより、一部の方々が不安やパニックを引き起こし始めている。昨年あたりから自殺願望を口にする人が増えている。特に他の人との交流が無い人が危ない。復興住宅に移ると、仮設住宅に比べて人間関係が希薄になり、引きこもるようになる人も増えることが懸念される。ますますスピリチュアルなケアも必要になっている。そういう意味で期限を切っての活動ではなく、地域のコミュニティに根ざした末永いケアが今後も必要とされる。」

活動理念は、震災直後から一貫して「被災した方々の隣人として寄り添い続ける」ということである。そこで、心のケアを大切にし、傾聴と訪問に力を入れているという。岩塚さんは、震災から半年間で千人以上の傾聴をしたという。

6月ごろには仮設住宅ができてきたので、避難所から仮設住宅での活動に切り替えていった。絶えず国内外から支援物資が届いた。米軍の三沢基地内のキリスト教会からは、野菜や仮設住宅で生活を始めるための日用品セットが大量にとどいて、会堂一杯となることがあった。時にはトラック1台の物資が届いた。それを仮設住宅や自宅で避難中の方々に配布した。

宮古市には当初62か所の約2千世帯の仮設住宅が建設された。ピーク時にはその90％ほどをカバーする活動となった。青森の宣教師が釜石市、大槌町でモバイルカフェをやっていた。仮設住宅ができてからすぐに、それを取り入れてみた。最初は赤前仮設住宅だったが、今は被災地全域に広がっている。当初は外にテントを張ってやっていたが、徐々に仮設住宅の集会所、談話室でカフェ（あるいはサロン）形式で行われるようになっていった。

震災直後からしばらくは、活動範囲を宮古市だけに限定していなかったので、野田村、宮城県の亘理町、山元町や福島県会津若松の仮設住宅へも行ったこともある。

仮設住宅での活動は、プログラムも多岐にわたっている。傾聴を中心にして、クラフト、音楽、生け花、落語、講談、なども行っている。ボランティアのほとんどがキリスト教徒だが、そういった能力・「タラント」[注(4)]のある人が多い。その他には合同教会の牧師で花屋だった人がいるので、フラワーアレンジメントをしたり、調理師が来れば一緒にデザートを作ったり、ギターで懐メロ、マッサージ、包丁研ぎ等できることがあれば何でもしてきた。小坂忠さんをはじめ多くのクリスチャンミュージシャンが来てコンサートを開いた。

ただし、活動の内容は状況に応じて変わるという。特に今は転換期をむかえていて、仮設住宅にいた人たちも3～4割はそこを出ている。復興住宅に移って孤立しないように、新しい生活をはじめた人達の生活が軌道に乗るまで支援を続けていくそうだ。

・被災地のコミュニティ再生とキリスト教会

震災直後に痛感したことは、それまでのキリスト教会のあり方が、地域のコミュニティと遊離した存在であったということである。震災後の支援活動を続ける中で、キリスト教会も地域のコミュニティを共に担う存在として、共に復興していくという姿勢でかかわり続けさせていただきたいと願っているという。

注(4) 元々は古代ギリシャ、ローマ等地中海地域で使われた質量や貨幣の単位。キリスト教界では新約聖書「マタイによる福音書」25章14～30節にイエスがタラントをもちいたたとえ話をしたという記述がある事から、「神から与えられた能力」という意味でつかわれる。現代語の「タレント」の語源とされる。

F　末日聖徒イエス・キリスト教会（モルモン教）（宮古市南町）

2013年9月20日に末日聖徒イエス・キリスト教会（以下、モルモン教）の宮古ワード[注(5)]の長老**松重光治さん**と実際に支援活動にあたられた**高橋浩之さん**（1974年生）からお話を伺った。モルモン教宮古ワードは30年ほどの歴史があり、これまで4回の移転の後、現在の場所となった。会員は60名ほどで、30～50代が多く、多くは宮古市民である。普段は日曜日、10時から12時に礼拝（参加者20～30名ほど）と、水曜日午後7～8時に英会話教室（参加者14～15名ほど）を行っている。

・被災状況

会員の死者はなかったが、家族を亡くした人はいる。また自宅の全壊が10名、避難所への避難が12名いた。3月13日の日曜日は礼拝を休み、その後も5月になると通常とは異なる形で集会し、聖餐式のみ行った。5月には日曜日に2トントラックに積まれてきた布団、食料などの支援物資を配布する活動を行った。日曜日に集まってきた会員に届いた物資を渡して、必要のありそうなところに配ってもらった。

3月19日に金沢ワードから4トントラックで食糧、衣料がとどいたので、一般の人に配布した。藤原神社のように正式な避難所として登録されていないため、行政の手が届いていない避難所へ直接配布した。道路の状況が悪い中での支援活動だった。軽油はほほえみの里[注(6)]、社協、サンホームみやこ[注(7)]、ニチイケアセンター宮古[注(8)]、あお空[注(9)]などの福祉施設に配布した。

3月28日に6名のボランティア隊が到着した。彼らの他、八戸、東京、兵庫、仙台などから来てくれたモルモン教の会員によって実施した。岩泉・田老、宮古市内、山田・大槌、釜石の会員を一軒ずつまわって安否確認をした。藤原での泥かき、支援物資の配布、スコップなどの道具は自前で用意した。宮古ワードをボランティアの宿泊所としても利用した。

モルモン教を通じて、東京から毎週バスでのボランティアツアーがやってきたが、それは仙台へ行っていた。宮古には仙台地域の宣教師がボランティアセンターを通じてこちらへ派遣されていた。社協のボランティアセンターが立ち上がってからは、それを通じてボランティアに参加した。

モルモン教では、震災の前から3か月分の備蓄をするように指導していた。そのために被災していない地域では被災地にすぐに備蓄をまわすことができる。また、モルモン教会は岩手県に義援金を送っている。

・会員の心境の変化

モルモン教の教えでは、生きていれば必ず試練があるが、そのことによって強くなれるというものがあり、この震災は必要なものだったのだと教えている。決して嘆いているばかりではなく、精神的に強くなることができた。被災していなくても多くの支援があり、そうした人とのつながりを大切にするという気持ちが強くなっている。

・慰霊など

普段の祈りや説教の中で組み込んでいるが、個別の死者への祈りは行っていない。

・心のケア

傾聴ボランティアを行っている。社協を通じて派遣されているので、

注(5) モルモン教におけるワードとは支部に該当する。

注(6) 鍬ヶ崎第9地割39番地27
http://www.jinsenkai.com/network/network_detail.php?cd=20130738

注(7) 崎鍬ヶ崎第4地割1番地20　http://www.wakatakekai.or.jp/

注(8) 岩手県宮古市太田1丁目2番3号　http://www.nichiigakkan.co.jp/

注(9) 岩手県宮古市向町2－34

胸にモルモン教を示す名札はつけていくが、宗教の布教はしない。

・もし、心霊現象があったら?

教会としては心霊現象を認めも否定もしない。それをうけとめてあげて聞いてあげ、それを癒してあげる。震災とは関係なく儀式を行いその中で癒しを行うことがある。ただし、この癒しの儀式は教団本部が認めているものではなく、個人的な考えで行っているものである。個人だけではなく、場所を癒すということもある。その場所がその人にとっていい場所になるようにという意味である。

G　立正佼成会宮古支部（宮古市板屋）

釜石教会[注(10)]の支部にあたる宮古支部は211世帯の信者を抱えている。1960年ごろ釜石教会から柏田のぶえ氏が布教をはじめた（宮古市教育委員会編1994年：745頁）。2013年9月20日に宮古支部支部長の**福士和男さん**からお話を伺った。

地震直後は3、4人の信者が避難してきたという。その後安否確認をはじめた。近い人は名簿を見ながら歩いて行ったのだが、全体を把握するまでは1年以上かかった。把握できている被害状況は、死亡8名、床上浸水6戸、床下浸水4戸、全壊23戸、半壊23戸、仮設へ入居13世帯である。ただし仮設へ入居した人には市が提供したアパートに入った人など仮設以外に避難した人は含まれていないので、実数はこれより多くなる。

支援活動は釜石を中心に実施した。全国で239教会の信者が、岩手の釜石教会を通じて各支部に派遣され、生活必需品、衣類、食品、マスク、豆、味噌、醤油、毛布といった物資や義援金を配布した。全国から多種多様な物資が届けられたが、何がどのくらい届いたかは正確な記録を残していないのでわからない。届いた物資は信者に配布し、一般の人には配布していない。対外的な支援よりも信者さんへの対応で精一杯だったと、当時を振り返る。支援物資はインタビュー当時も全国の信者から届けられるので、信者に配布している。また、教団からは宮古市へ義援金を出し、亡くなった信者には教団から弔慰金を出している。全国からボランティアも駆け付けた。多い時には1週間に1～2回来ていたので、宮古教会を宿泊所として提供した。

板屋の仮設住宅で盆踊りをしたいという希望があったので、8月15～16日に駐車場を提供した。2012年と13年は行った。今後も要望があれば提供したい。立正佼成会は宗教団体なので、一般の方への支援は相手を当惑させてしまうといけないので、要望があれば応えるという形にしている。

・慰霊活動

教会では一周忌、三回忌を全体で行った。その他、毎朝、釜石教会の支部では震災で亡くなった方の供養を行っている。最初の1年は全国の教会で毎朝供養し、翌年からは月命日の11日に供養を行っている。

・心のケア

信者に対して以前より頻繁に訪問し、おしゃべりをするようにしている。傾聴が中心で、宗教の話は求められないかぎりしないようにしている。信者さんは多くの問題を抱えている。それを熱心に聞くことが大切である。これは震災前後で変わるようなものではない。

当初、遺族たちは落ち込んでいたのだが、信仰のために立ち直った人が多い。母親を亡くした青年は引きこもりがちになっていたが、今は教会に来て明るさを取り戻している。だれもが佼成会の中にいるので何かしらの係りがある。人のためにと働いているので、自分のことを考える時間が無くなってしまうのがいいのかもしれない。また、立正佼成会は先祖供養が自分でできるので、自分で立ち直ることができるという。落ち込んでいた人も、立正佼成会の信仰で立ち直るきっかけとなった人も多い。

注(10) 釜石教会の支部は山田1か所、大槌1か所、大船渡1か所、釜石2か所、遠野1か所と宮古1か所の計7か所。

2　宗教系団体の支援

前節にみたように宗教系団体による被災地支援は広く行われた。一方、宣教など宗教行為は行わないが、宗教的な由来をもつNGO、NPOの活動も目を見張るものがあった。ここではキリスト教に由来する盛岡YMCA宮古ボランティアセンター、CCMN、台湾仏教慈済基金会といった団体の動きを取り上げたい[注(11)]。

A　YMCA宮古ボランティアセンター（以下、宮古VC）

震災当初から市内のプロテスタント教会と協力しながらボランティアセンターを立ち上げ、全国のYMCAを中心に多くのボランティアを受け入れたYMCA宮古VCの動きを紹介したい。

YMCA宮古VCの2014年度までのボランティアの受け入れ数は以下の通りである。

2011年度　1万1千202人（2011年3月11日から2012年3月まで）
2012年度　7千867人
2013年度　7千871人
2014年度　3千633人（10月まで）

少ないスタッフと、それほど広いとは言えない施設の中で、これだけの人を受けいれたことは記録に残しておくべきであろう。

盛岡YMCAの初動体制と宮古VCの立ち上げに関して、2015年5月6日に盛岡YMCA主事の**濱塚有史さん**（1961年生）からお話を伺った。また、日本基督教団内丸教会の牧師、中原眞澄さんも当時の状況を詳しく記している（中原2013年）ので、あわせて参考とした。

震災当日盛岡YMCAにはスタッフが4名いた。当日は前潟センター開設の準備や、サッカー教室、学童の送迎をしており、濱塚さんはオフィスにいた。まずは学童の安否確認を行い、6時ごろには全員の無事を確認した。サッカー教室はスタッフが現地で待機し、来た子供には今日は行わないことを伝えつつ、安否確認を行った。

翌日、午前11時に集合したが、当然ながら学童の子供達は誰も来なかった。月曜日には学童の受け入れをすると決定し、連絡をした。日曜日は休みをとり、翌月曜日の14日、11時に集合した。また、沿岸の教会をベースとしてアクションを起こすことも決定した。濱塚さんはスタッフにはただでさえ薄給なのにいいのかと確認したら、「助けを必要とする人たちが大勢いるこの時に動いてこそYMCAではないか」という声もあり、実施することにした。ただし、盛岡はスタッフも少ない小さなYMCAで力不足ではないかと悩んでいた。そこで、元YMCA同盟主事をつとめていた日本基督教団内丸教会の牧師、中原眞澄さんに相談したところ、阪神淡路大震災の経験から、活動をはじめさえすれば、全国の支援が続くから、力不足と限界づける必要はないと後押しをされ、決心した。

16日、被災地に赴いていた奥羽教区の議長で、牧師の邑原宗男さんに連絡し、YMCAが被災地の教会と協力して、救援活動を行うことを提案し、了承され、宮古教会が推薦された。17日には日本基督教団宮古教会の牧師森分和基さんと連絡が取れ、18日に濱塚さんはじめ3人のスタッフが森分さんに面会し、活動を開始する。19日には本格的に活動が始まり、宮古教会内に「盛岡YMCA宮古ボラン

写真1　YMCAのボランティアによる交通安全見守り
2015/12/07　撮影：藤野陽平

注(11)　なお、カトリック系のカリタスの動向は、本書第2部第8章を参照のこと。

ティアセンター」が設立された[注(12)]。

設立当初にもかかわらず、23日には横浜ＹＭＣＡと盛岡ＹＭＣＡから応援が到着し、25日には全国からの派遣スタッフによる体制となる。４月22日には「山の会」のメンバーらが派遣されて、大量の物資と３人の専門家ボランティアとして活動を行った。山の会はその後も長期にわたって活動を続けている。５月には池田勝一さんが大阪から派遣され、初代所長に着任し、人的体制が整っていく。

初代所長の池田勝一さん（任期２０１１年５月から２０１２年３月）は、１年目の活動目標に以下の４つをあげている。

①地元の方々が１日も早く元の生活に戻れるように奉仕すること。

②仮設住宅に入居されている方々が孤立・孤独にならないようコミュニティー作りをすること。

③地元での積極的な買い物、飲食、観光案内を通して地元を盛り上げ元気にすること。

④ボランティアとして活動してくれた仲間達に、地元で知り合った方々と友人となり手紙の交換をしたり、再びボランティアとして地元に訪問してもらえるよう働きかけること。

写真２　ＹＭＣＡのサッカー教室
2015/02/19　撮影：藤野陽平

注(12) ボランティアセンター立ち上げ直後の様子は『岩手日報』２０１１年４月５日付にも紹介されている。

この頃の活動は、電気、ガス、水道などのライフラインが寸断される中、近隣の家のがれきの撤去、荷物の運搬、天井・壁・床はがし、道路、側溝のヘドロ除去などを行った。また、ニーズの調査も同時に行った。最初期の活動は、社会福祉協議会からの推薦や個人的なつてで見つけていた。

６月から10月には避難所となっていた小学校や仮設住宅、地域商店街でのイベントで、タコヤキや焼きそばなどの炊き出しなどをし、11月から３月は仮設住宅の寒さ対策の断熱マットしき、炊き出しなどを行った。

特筆すべきは宮古小学校の通学路での交通安全見守りである。これは津波で故障した信号機のかわりに安全確保のためにはじめたそうだが、地道であるが地元に挨拶が広がる大切な働きである（池田２０１３年）。

この交通安全見守りは宮古のＶＣに専従のスタッフがいなくなった２０１５年４月以降もボランティアの手によって継続されている（写真１）。復興に携わる仕事で宮古にやってきた三浦英博さんは、毎朝７時から８時30分頃まで、宮古小学校にほど近い交差点にＹＭＣＡのゼッケンをつけて、交通整理を行っている。本人談によれば、２０１５年は４月から12月までの間に一度だけ休んでしまったが、それ以外の学校がある日には、雨の日も雪の日も路上に立ち続けている。

寡黙で自己主張をしない性格の三浦さんだが、挨拶をし、ハイタッチで小学生がやってくるのを迎えている。また、小学生だけではなく、通りがかりの人全員に挨拶をし、さらに行きかう車やオートバイ１台ずつに会釈をする。三浦さんは毎日この見守りを終えてから仕事へ向かう。繰り替えすが、三浦さんはＹＭＣＡのボランティアであり、この活動は義務ではない。毎朝出勤前の時間をこうした地道な活動に使っている。このことを小学校から評価され、２０１５年11月25日に宮古小学校の児童会から感謝状も贈られている。

２０１２年に入り、ボランティア活動もがれきの撤去といった内容から、子供達を対象とした野外活動のようなプログラムを行なうよう

になる。2012年の後半には宮古小学校のグラウンドでサッカー教室をはじめた（写真2）。3代目の所長の木田泰之さんによれば「震災後狭い仮設住宅での生活に加え、公園やグラウンドに仮設住宅が建ち、いつもの遊び場が無くなってしまいました。子供達の心と体に大きな影響（ストレスを感じたり、肥満の増加）を与えています。またそれを心配する保護者の大きな心の負担も想像に難くありません。少しでも子どもの心を開放し、思いっきりエネルギーを発散させ、子どもたちの笑顔を取り戻すプログラム」が必要であった。そのために、月1回の野外活動（アドベンチャークラブ）、夏・冬・春のキャンプ、サッカー教室、水泳教室などを行うようになった（木田2013年）。

小学生だけではなく、中高生に対してもプログラムを用意している。これはリーダーシップ育成を主眼に置いたもので、宮古を支える若い力を増やし、将来の担い手とすることを目指している。例えば、2015年2月21日に「なんだりくうべ」というプログラムが行われた（写真3）。これは盛岡の大学生と宮古の高校生が交流することを目的としたもので、企業から支援を受けている大学生が中心となり、企画運営された。内容は3班に分かれて宮古で買い物をして、料理をするというもので、朝9時30分に集合し14～15人が参加した。和気あいあいとした雰囲気の中進められ、16時に解散した。

写真3　なんだりくうべの一幕
2015/02/21　撮影：藤野陽平

当初、ボランティアは教会に寝泊まりしていたが、活動拠点として2012年7月8日に、宮古教会の横にプレハブ2階建てのボランティアハウス（写真4、5）が完成した。もともとあった店舗が、被災し宮古教会の横がさら地になったので、そこに建設した。宮古教会と協力しながらの活動であるので、すぐ近くにある方が便利であった。

2014年10月30日に4代目センター長の**斎藤勉さん**（49歳）にお話を伺った。現在の業務内容は事務作業が多いが、巡ることのできる仮設（5か所）と個人宅に出向き、傾聴ボランティアをしているという。ボランティアが来れば、何か活動はするのだが、減っているので従来とは活動の内容が変わってきている。炊き出しのような活動は今のところしていない。個人的に依頼を受けたり、社協からの依頼があったりすれば、活動もするが、子どもの野外活動の方が中心となってきている。第3土曜日に行う野外活動の参加者は15人くらい、サッカーは20人くらいの参加がある。2013年度までは無料だったが、2014年からは一部負担してもらっている。実行委員会から声がかかるので、町のイベント、復興市、魚菜市場のイベント等で焼きそばとたこ焼きを出している。日程が決まると各地のYMCAに声をかけてボランティアに来てもらっている。

写真4　YMCAのボランティアハウス内部
2015/12/07　撮影：藤野陽平

ボランティアの受け入れは、あまり大人数のものだとイベントの手伝いならば可能だが、仮設の訪問ができないので、難しくなってきている。ボランティアには鍬ヶ崎、田老辺りを巡検してもらうようにしている。宮古の街中だけみて復興したと思われたくない。中ではなく、外を見てもらうようにしている。

ボランティアに来た人達に言うのは、現場を見て思ったことを地元

写真５　ＹＭＣＡのボランティアハウス外観
2014/10/30　撮影：藤野陽平

に帰ってから伝えてほしいということ。まだまだ、復興していないということ。そして、来てみたいという人がいればその人を連れてきてほしいということ。仮設の人達は忘れ去られることを嫌がっている。思い出したくもないことなのだが、忘れられるのはもっと嫌なのだ。

今後は心のケアの重要性が増してくる。斎藤さんはキリスト教徒ではないが、キリスト教の精神を引き継いで行っているという。最初は「ＹＭＣＡって何？」という反応をされることが多いので、その説明からはじめる。他の団体は時間と共に帰っていくが、ＹＭＣＡさんもそうなんでしょとよく言われる。この言葉は「とてもつらい」という。斎藤さんも２０１５年３月には仙台に戻るが、その後も続けて通いたいと思っている。

・今後に向けて

２０１５年の４月に宮古ＶＣの専従スタッフは宮古から撤退した。しかし、宮古ＶＣの母体が盛岡ＹＭＣＡなので、盛岡から定期的に人を派遣して、宮古での活動は続けている。同時にボランティアハウスも田の神へと移転した。今後はサッカー教室、野外活動等を継続する。野外活動は向こう10年間２０２４年までは月１回ほど活動することが決まっている。当初こうした活動に集まる子供たちは少なかったが、徐々に集まるようになってきている。地元の高校生にも声をかけて、今後のボランティアリーダーとなるように育成している。そのことを視野に入れて、今年度からは将来に向けて、ボランティア自身が自分達で活動の内容を考えて企画するようにさせている。

濱塚さんによれば、ＹＭＣＡはキリスト教系の団体だが、宣教はしないのだという。もし必要ならば、盛岡ＹＭＣＡの「きみでいいんだよ」というキャッチフレーズを伝える。それこそ彼の考える復興なのだという。

Ｂ　キリスト教のＣＣＭＮからＮＰＯ法人「with you global　あなたとともに」へ

ＣＣＭＮという香港に本部を置き、台湾、アメリカ、カナダ、ブラジル等でも活動するキリスト教のネットワーク団体がある。香港、台湾から月に１チームほどのボランティアが、このＣＣＭＮの派遣で来ている。この団体から宮古、大船渡、陸前高田への３チームが派遣され、支援活動を行っている。この団体に参加し、２０１１年11月１日に香港から夫婦で活動している**タン・ヒロシさん**（本名、譚浩洋さん１９７８年生）[注13]と、**ナオミさん**（周燕芬さん１９７８年生）のご夫婦からお話しを伺った。お２人は山田町に暮らしながら、宮古のオーシャンズ宮古国際交流倶楽部の日本語教室に通っている。

２０１０年４月にクラッシュジャパンを通じて、遠野をベースとして２週間のボランティアを行った。２０１１年11月より住み込みの活動を始めた。２０１１年４～５月の最初のベースは遠野に置いて、そこから通っていたのだが、大変なので６つのベース、３チーム（総勢17名アメリカ人１人、日本人９人、香港人７人）を設置した。宮古は香港人３人、日本人３人の６人のチームだった。宮城県で活動する団体は多いが、岩手は少なかったので岩手にした。最近は漁の手伝いもするようになった。漁師は高齢者が多く、若い人の力が必要とされているという。仮設住宅を訪問し、心のケア、復興住宅のプレゼント、イベントも行っている。

注(13)　彼については（櫻井２０１４年）でも紹介されている。

同じチームの日本人たちはこちらで電気、土木関係や、生活相談員（仮設に行って話を聞く仕事）といった復興に関わる仕事を見つけて、空いた時間に活動に加わっている。

２０１４年からＮＰＯ法人「with you global　あなたとともに」を設立し、30～40代の人が集まる場所を提供することを目的に、大船渡ではコンテナハウスを使ってカフェをやっている。そこにはビリヤード台を置いている。アメリカのYouth for Christという団体から、コンテナと場所を提供してもらった。

ＮＰＯ法人としたのは、それまでのＣＣＭＮの活動は宗教が主体だったが、ＮＰＯにして宗教性をなくすためだった。ＮＰＯ化以前は宗教の狭い枠組みの中での活動だったが、それを取りはずすことができる。とはいえ、ＣＣＭＮと関係がないわけではなく、資金、ボランティアの人手などの支援は受けている。

宮古チームはお年寄りの支援を目的に、仮設での手作り品を作るイベントをしている。1か所の仮設に8～10人の参加があるが、ほとんどが女性の参加者である。避難所時代から付き合いのある山田、大槌の10か所を回っている。仮設住宅にはもともと知り合い同士ではない人達が暮らしているので、イベントではみんなが楽しく集まって、交流し、知り合いになれるようにする。手作り品は販売してみなさんの収入にもなる。

日曜日には山田町の教会に通っている。宮古ではコミュニティ・チャーチや、日本基督教団宮古教会に行ったことがある。キリスト教のバックグラウンドがあるので、沿岸部の教会からの協力が得られている。牧師たちとも関係を持って活動している。ＮＰＯ法人化で宗教以外の活動もしているが、宗教も大切にしている。宗教性を薄めつつあるが、精神はキリスト教で、スタッフの全員がＣＣＭＮのネットワークの人たちである。

・どうして日本なのか

２００４年に夫婦で初めて日本に来たのだが、その時に出会った牧師から日本人の心の必要性を教えられた。日本はお金があって、オシャレかもしれないが、友達が少なく、心に傷がある人が多い。それを何とかしたいというヴィジョンを持ったという。途上国ではなくて日本にしたのは、途上国の問題はお金とか開発といった目に見えるものが多い。しかし、日本の問題は目に見えない。だからより深刻で大切だと思った。それでいつかは日本に行ってキリスト教の活動をしたいと夫婦で話していた。それがいつのことなのかはわからなかったが、東日本大震災のことを知って、それがその時なのだと感じたという。

ヒロシさんは香港で9年間警察官を務めていたが、それをやめて来日した。香港では10年間働くと退職金が３００万円ほど出る。しかし、9年目に大震災があったのですぐ来てしまい、もらえなかったという。4月に1度来て、壊滅的な状況を目の当たりにし、来日を決心した。その後数回訪問して11月に長期のビザが取れた。山田に残って活動している団体はほとんどなくなったが、ビザの問題だけクリアできれば、今後も継続して活動することを望んでいる。ただし、言語の問題は深刻で、自分が言いたいことを充分に伝えられないし、間違ってしまうこともあるという。また、文化の問題も難しく、何をすると失礼なのかよくわからないことも多いという。

来日当初は日本語検定5級程度の語学力だったが、２０１５年に2級を取得し、２０１６年には1級に挑戦するという。それで、今も傾聴ボランティアをしているが、50％くらいしか話がわからない。細かいニュアンスはわからないから聞いているだけだという。確かに方言もあり、なかなか大変であろう。

将来は地元の人とつながりを強めて、別の場所で何か災害があった時に、ここの人とその場所に行って、支援活動を一緒に行いたいと思っている。そのためにカウンセリングなどのトレーニングを行っている。これは宗教ではなくＮＰＯ法人として行う。ここの人たちは今回地震や津波を経験した。他の場所で災害があった場合、こういう経験をした人が行くことはとてもいいことだと考えている。その時には宮古や山田の人達と一緒にボランティアに行きたいと思っている。具体的に

は、チャンスさえあれば２０１６年に地元の日本人と、ヨルダンやシリアに行って、難民の仮設住宅で支援活動をするということを模索している。

Ｃ　台湾仏教慈済基金会（慈済会）

東日本大震災では日本国外の宗教団体からも多くの支援が寄せられた。こうした動きは当然宮古市でもみられ、その中で傑出したものとして台湾仏教慈済基金会（以下、慈済会）の見舞金配布について紹介したい。台湾の慈済会は会員数５００万人を超える世界最大の仏教系ＮＧＯで社会貢献活動を非常に重視している（金子２００５年）。

慈済会の東日本大震災における支援活動については金子昭がまとめているので（２０１１年）、ここでは宮古市での活動を紹介する。慈済会の日本支部は１９９１年に設立され、普段から慰問活動、バザー、老人ホーム訪問、ホームレス支援、国際救援活動、募金活動、ケア活動などの社会貢献に力を入れている団体である。会員には登録し定期的に一定の額（金額は不問）を寄付すればなれるが、その大部分は在日華僑で、女性が多い。大部分は東京在住で東京に2千人、全国で約5千人の会員がいる（『日本慈済世界』２０１２年３月15日特別号：12～14頁）

慈済会は２０１１年６月９日から12月４日にかけて岩手、宮城、福島の被災者、９万６千４６１世帯に49億８９８３万円の大型見舞金と救援物資を配布した。この活動に参加したボランティアはのべ４千２８３人であった。この活動の一環として９月23～25日、対象地域を宮古市、洋野町、久慈町、野田村、田野畑村、岩泉町として５千１４０世帯に第６回住宅被害見舞金配布が行われた。宮古市では被災した３千９７７世帯に対し、１億９８８５万円の見舞金が配布され、この時に参加したボランティアは２０７人だった（『日本慈済世界』２０１２年３月15日特別号）。

より具体的なタイムスケジュールをみてみよう。９月22日午後４時、宮古市民総合体育館、多目的体育館に集合した。翌23日と24日の両日、午前８時、宮古市民総合体育館、多目的体育館に集合した慈済会は９時から18時（24日は17時まで）の間に２千２３１人（23日）と１千１９７人(24日)に見舞金を手渡した。25日には場所を変えてグリーンピア三陸みやこ多目的アリーナに午前８時に集合し９時から12時までの間に５２８人に見舞金を手渡した。

この活動は事前に趣旨を説明したうえで宮古市側も協力する形で進められ、例えば以下の罹災世帯、人数の情報の提供が宮古市からなされた。世帯人数によって見舞金の額が違うので、事前にこうした情報がなければ見舞金が実際にいくらほど必要か判断できない。

見舞金の支給対象となるのは３月11日時点で宮古市に在住し、かつ、住んでいた住宅が全壊、大規模半壊、半壊となった世帯で、支給額は単身世帯３万円、２～３人世帯５万円、４人以上世帯７万円、申請に必要なものは提出用罹災証明書、身分を証明するもの、印鑑であった。この内容は『広報みやこ』９月15日号の折り込みチラシとしてアナウンスされた。

見舞金に関してその支給する理由を「私達は被災者の方々を家族の一員と考えています。家族が苦しんでいるとき、もっとも直接的な助けとなるのは見舞金」と述べている。活動中、被災者に対して90度のお辞儀をするのだが、これは「三輪体空」といい、布施を施される人も、施す人も、施される物も違いがなく、施すことと、受けることが同じであるので、相手が苦しみの中にいることで施す機会を与えてくれることに対して、90度のお辞儀をして感謝の念を示しているのだそうだ。活動中は全員が制服を身につけるが、それは「正しく行動するために制服を正しく身に着ける。身だしなみをきちんとすることで自然と気品や人格がにじみ出てくる。これが慈済の謳うヒューマニズムである」という。さらにどんなに共感しても相手を傷つけてしまうかもしれないので、慰問時に涙を流さないことも決められている。

見舞金は「39の国で慈済人が行った募金によって集められ」たものであり、ボランティアは自費で交通費食費宿泊費を賄い、募金で集め

たお金がここに使われることはない（『日本慈済世界』２０１２年３月15日特別号：10～11頁）。

ボランティアは常日頃から訓練されており、今回は以下の役割分担がされていた。協調係（会場のスタッフのまとめ役、会場の窓口、市町村の担当者との渉外）、総務係（必要な物資の調達）、財務係（見舞金の準備、配布世帯数金額の集計管理）、交通係（ボランティアの移動手段であるバス、備品を運ぶトラックの手配、スケジュール管理）、香積係（炊事）、引導（案内係）（見舞金配布の際に、来場者を案内。一次受付の「査詢」：身分確認、該当条件、罹災証明書の確認後来場者を二次受付へ案内する。二次受付の「核章」：二重受領がないようにチェックし、来場者に見舞金を手渡し、受領印をもらう）。

宮古での見舞金配布時の様子を参加したボランティアが文章にしている（『日本慈済世界』２０１２年３月15日特別号：38～39頁）。大型バス１台、トラック１台、ワゴン車３台で来宮した慈済会のボランティアの多くは女性であった。重たい物資（１千８１３箱のインスタントライス、総重量10㌧）の運搬もあり、大変であったが、トレーニングを受けているので、問題なかったという。このインスタントライスを１世帯２㌔、６千世帯に配布した。第１日目には朝７時前から受け取りにきた人たちの長蛇の列ができており、中には見舞金のおかげで祖先の供養ができるようになった女性がいたと紹介されている。翌日は２組に分かれての活動であったという。第１組は宮古市の約４千３００世帯の被災者への見舞金配布と慰問をし、第２組は宮古市北部約１千３００世帯の被災者への見舞金配布と、以前見舞金を配布した世帯への慰問を行ったという。その際にインスタントライスは日本でなじみがないので、その食べ方を細かく説明することもあったという。

表１　慈済会による見舞金、世帯数、総額
（『日本慈済世界』2012年３月15日特別号による）

県	市町村	世帯	総額(単位､万円)
岩手	洋野町	27	135
岩手	久慈市	261	1,353
岩手	野田村	458	2,406
岩手	岩泉町	187	919
岩手	田野畑村	230	1,204
岩手	宮古市	3,977	19,885
岩手	山田町	2,761	14,045
岩手	大槌町	3,591	17,885
岩手	釜石市	3,678	18,254
岩手	大船渡市	3,355	17,253
岩手	陸前高田市	3,568	18,690
宮城	気仙沼市	8,065	41,465
宮城	南三陸町	2,893	15,953
宮城	石巻市	29,529	149,325
宮城	女川町	2,554	12,848
宮城	東松島市	10,208	54,742
宮城	松島町	1,310	7,100
宮城	塩釜市	3,268	16,516
宮城	利府町	748	4,062
宮城	七ヶ浜町	1,110	6,218
宮城	多賀城市	4,274	21,614
宮城	名取市	3,241	17,503
宮城	亘理町	2,735	15,487
宮城	山元町	2,843	15,261
福島	相馬市	1,590	8,860
	合計	96,461	498,983

表２　宮古市の罹災世帯数、人数

１人世帯	1,134世帯	1,134人
２人世帯	1,302世帯	2,604人
３人世帯	811世帯	2,433人
４人世帯	502世帯	2,008人
５人世帯	269世帯	1,345人
６人世帯	188世帯	1,128人
７人世帯	60世帯	420人
８人世帯	18世帯	144人
９人世帯	8世帯	72人
10人世帯	3世帯	30人
11人世帯	1世帯	11人
計	4,296世帯	11,329人

3　被災から復興へむかう日本基督教団宮古教会　伝統と被災との先に

大通一丁目に1軒のキリスト教プロテスタントの教会があった。日本基督教団宮古教会だ。１９０９年設立の古い教会で、すでに１００年以上の歴史がある。それはつまり今回の津波で3回目の浸水だったということを意味する。山口にある、ひかり幼稚園（１９６９年開園）は岩手県キリスト教学園が母体だが、宮古教会との関係は強く、現園長は牧師の森分さんが務めている。また、すでに１９９８年に閉園したが、１９２９年12月1日から宮古教会内に宮古幼稚園も併設しており、伝統的に子供との関わりの強い教会である。この宮古教会とひかり幼稚園がこの度の津波を契機として、西町へ移転することとなった。本節では本教会の被災状況と移転に至るまでの動向を報告する。なお、被災から移転までの出来事は年表にまとめたので、参照いただきたい。

宮古教会の建て替え前の会堂（写真6、7）は１９３８年に建築されたもので、当時の牧師の羽生義三郎さんの設計による。羽生牧師は東北学院大学神学部を出ているが、その前には秋田工業を経て、東京高専に通った経歴を持つ。一級建築士の資格を持っており、各地の教会の設計をてがけた。日本基督教団の一関教会も彼の設計で、国指定の文化財となっている（一関市ＨＰより　http://www.city.ichinoseki.iwate.jp/index.cfm/18,8319,132,159,html）。宮古教会も当時の建築を思い起こさせる雰囲気のある建築物である。

現在の会員は10名で高齢者が大半を占めている。教会員の人的被害はなかったが、被災状況は教会が2メートルの浸水をした。津波は玄関を破って、会堂に入り込んだ。押戸なので、後ろの部屋へ、そして事務室、台所へと流れ込んだ。会堂内のものは後ろにむけて流された。会員宅も1軒浸水し、求道者（洗礼を受けていないが教会に通っている人）宅の全壊が2軒あった。

２０１４年11月1日、宮古教会の牧師、**森分和基さん**（１９７６年生）にお話を伺った。愛媛県、八幡浜出身の森分さんは4代続く牧師の家系で、祖父のおばが第1代目の牧師で婦人伝道師だった。関西学院大学の神学校、修士課程を修了し、２００２年に最初の赴任地として来宮した。

震災当時ひかり幼稚園にいた森分さんは、幼稚園で物資を集めて、山口の自治会と相談し、自治会長がその物資を茂市の支援物資基地へ持っていった。山口地区は自治会の力が強いところで、米をまとめ買いし、建築関係の業者から発電機を借りて避難所とした。電気、ガス、米が確保できていた。教会は被災し、避難所にはならなかったが、初動段階では幼稚園が十分にその機能を果たした。

ＹＭＣＡと協力しながら行ったボランティアの受け入れについてはすでに述べているので、ここでは宗教者としての彼の話を紹介したい。

「今後の宗教として大切なのは、自己肯定感だ。震災を体験すると自分の力が小さく見えてしまう。しかし、そこで大切なのは生きる力と愛される経験で、どこまでも愛してくれる神がいるということを理解することだ。だから親にも子を大切にすることを教えているし、教会としては安心できる場所を提供する。

他人や自分がダメだと思っても、神はその人をいいやつだと言ってくれる。このことが生きる力となる。多くの人が震災後「生き残ってしまった」という否定的な思いが入っている。そういう意味で宗教のもつ意味は大きいだろう。

どうして震災が起きたのか？その答えはないと思っている。自分達が理解できないようなものである。人が理解できるように説明をつけられ

写真６　日本基督教団旧宮古教会
2014/11/15　撮影：藤野陽平

るかもしれないが、それが本当のことかはわからない。死んでから天国に行って直接神様に聞いてみたいと思っている。その時までの楽しみにしている。」

牧師であり、園長でもある森分さんは、教会付属の幼稚園という点から、子供達へのケアについてもこう述べる。

「それまで私の顔をみるとまとわりついてくるのに、震災の後表情を失ってしまった子がいた。母親の後ろに隠れてしまう。これは恐ろしいことだと思った。ただ、子供にカウンセリングはできないので、こうした子どもの問題は教会付属の幼稚園の使命だと思った。年長の子たちが積み木で津波を閉じ込めるという遊びをしていた。こういう時には暴力的になってチャンバラ遊びとかをさせる。そういう感情を吐き出させてあげる。安心して幼稚園にこられるようにすることが、情操教育的に意味がある。

心のケアをしてあげようという大それたことではなくて、普通の世間話をすることが大切。数を多くこなすことはできないが、一人一人の状況を聞きながら、打てる手を打っていきたい。心の面でも生活の面でもできることがあれば、したいと思っている。」

表３　宮古教会の被災から建築終了までの動き（宮古教会の『移転・建築』経過報告による）

年	月	日	
2011	3	18	盛岡YMCAと連携しボランティアセンター設立。
2011	3	20	礼拝再開。
2011	5	18	震災特別会計口座開設
2011	8	30	震災復興委員会を組織。2013年3月までに30回の会合を行う。
2012	4	10	教会堂の応急修理着手　9月初旬完成。
2013	2	10	後期定期協会総会にて教会の移転を進めることを決議し、幼稚園の認定こども園化を進めることを承認する。
2013	3	27	震災復興委員会から移転・建築委員会へと発展的に変更、2014年4月までに18回開催。
2013	9	29	臨時協会総会にて、用地取得、教会・牧師館新築、資金計画を決議、認定こども園新築を承認。
2014	2	23	後期定期協会総会。設計者並びに設計概要を決議。
2014	10		施工業者決定。
2014	11	15	起工式。
2015	3		YMCAボランティアセンター、スタッフの常駐終了、4月に事務所移転。
2015	9	27	旧会堂での最後の礼拝。
2015	10	4	新会堂での礼拝開始。
2015	10	31	旧会堂・牧師館解体、用地の整地終了、認定こども園宮古ひかり開園式。
2015	11	2	認定こども園宮古ひかり認可、開園。
2015	11	21	認定こども園宮古ひかり第１回入園式。2015年12月現在75人が通う。

・震災後の様子

キリスト教会にとって何よりも大切なのは日曜日の礼拝である。３月11日は金曜日だったので13日が日曜日となるが、この日はまだがれきとヘドロが教会を覆っており、礼拝には誰も来なかったという。翌週の20日には教会員７、８人とＹＭＣＡの２人が集り、パイプいすを並べて祈り、情報交換をしたという。この時まで礼拝ができなかったと否定的に捉える見方もあるが、会友の山根さん（１９４７年生）は不自由な中で丸くなって礼拝を行ったときに、キリスト教の最初の教会とはこういうものだろうかという感覚を覚えたという。

３度目の日曜日である27日に、椅子も座布団も流されている中、20～30分と短いものであったが、教会員とボラ

ンティアで礼拝を行なった。その後、1時間かけて自己紹介し、教会員で話せる人は震災の経験などを話してもらった。これにはグループカウンセリングのようなことを考えていた。ただし、まだ話すことができない人もいるので、自己紹介ということにした。ボランティアで来ている人にもどこで何をしに来たのか話してもらい、情報を共有した。話を聞いてもらうこと自体に意味があったと森分さんは考えており、この形式を1か月続けた。

写真7　日本基督教団旧宮古教会内部
2015/02/22　撮影：藤野陽平

・YMCAを通じたボランティアの受け入れ

上述のYMCA宮古ボランティアセンターの受け入れをしたのが、この宮古教会である。教会側の対応について報告する。YMCAのメンバーには当初、教会が泊まれるような状況ではないので、幼稚園を宿泊施設とした。教会としてもボランティアに参加したいが、教会員は高齢者が多く、ヘドロの除去、がれきの撤去を手伝うことは現実的ではないので、YMCAを通じて教会に来るボランティアにまかせて、皿洗いや、清掃、炊き出しといったできることを担当した。またある教会員は水没した教会の書類を一枚一枚丁寧に水拭きしたという。

二戸の日本基督教団奥中山教会の人たちを皮切りに、たくさんのボランティアが押し寄せ、その数、年間1万人ほどになっていたという。4月27日ごろ電気が通ったので、その後は幼稚園を出て、教会に寝泊まりした。当時の様子を森分さんはこう振り返る。

「年間1万人というのは平均して毎日35人ほどになる。寝るときは牧師館に戻らせてもらっていたが、それ以外はずっと一緒にいる。正直しんどかった。緊張状態も続いていて、がれき運びは、体がもって1週間だろう。筋肉が固くなってきて、10日後くらいから立ち上がるのもつらかった。九州にいる両親に会いに行った時にマッサージを受けたが、その時にマッサージ師にあまりの体の堅さに驚かれたこともあった。」

特に準備をして受け入れたわけでもないので、当時の教会は相当混乱していたようだ。牧師もパニック状態であったと、自他ともに認めている。また、多くのボランティアを受け入れたいということと、教会を元の祈りの場に戻したいということの相反する感情が入り混じっている。教会には物資やボランティアのものが大量に置かれるようになり、それまでの静かな宮古教会の環境は変貌する。伝統的に社会事業に力を入れてきた宮古教会は、極力ボランティアに協力したいという思いが強かったし、それを教会も受けいれていた。一方で環境が変わった時だからこそ、変わらないものがあるということを大切にしたいという思いも一部の教会員の中にはあったようだ。また、ボランティアは教会で寝泊まりしているので、教会員よりもボランティアの方が教会にいる時間が長くなり、教会員が教会にいくと、まるでボランティアの人達の場所のようになっていて、逆に教会員がボランティアから「何か用ですか」といわれるようなこともあったという。役員の北村嘉勝さん（1952年生）は「誰もが譲れないシビアな体験だった。でも、それでもみんなが集まる場であり続けた」と当時を振り返り、様々な思惑が錯綜していた。それでも教会はそれらを包み込み受け止め、集まる場となっていたという。

・教会員の被災体験

教会員の一人で教会の目の前に住み、自宅が浸水した役員の**大森桂子さん**（1934年生）に2014年11月2日にお話を伺った[注(14)]。

花巻出身の大森さんは岩手県更生保護女性連盟副会長、宮古地区更

生保護女性の会会長、宮古市赤十字奉仕団委員長などを務めている。花巻教会にて、1955年ころ社会人になった時にキリスト教の洗礼を受ける。夫婦ともに中学校の教員だった。しかし、就職後、土日は部活動の顧問の仕事があり、教会に通うことができなかった。真面目に教会に通うようになったのは退職後のことだという。

大森さんは自宅に介護が必要な夫と2人でいる際に被災した。防災無線はこだましてしまっていて、何を言っているのかよくわからなかったが、津波が来るまでは電気が付いていたので、家でテレビを見ていたという。津波が来るというので、障子をあけて外を見ていると道路沿いに真黒な龍のように津波ががれきを押しながら進んで来た。夫は自分で歩くこともできたが、ベッドでの生活だった。そこに水が入ってきた。水深はどんどん上がってくる。「お父さん2階へ行こう」と言ったのだが、立てなくなってしまう。そうこうしているうちに、窓ガラスを3枚破ってあっという間に水が入ってきた。介護用のベッドはパイプでできているので、片側が浮いて傾いた。立ち上がれなかった夫も水に入ったために浮力で立ち上がれたので、2人で立ち上がり耐えた。

3時25分から4時5分までの40分ほど胸の上、肩の下位まで水が来た。これ以上来たらだめだと思った。それでも「こんなところで死んでいられないよね」と夫を励ましつつ、神様に「もしこれからもこの世で私の力が必要でしたら助けてください」と心のなかで祈っていたという。

水が下がってきたら、部屋は引き戸なので開けることができたので、夫を引っ張って2階へ移動できた。「本当に命拾いをした。九死に一生を得た」という気持ちだったという。夫が病気で逃げられなくて本当につらいことも多かったが、神は耐えられない試練にはあわせないという聖書の言葉を信じて耐え抜いたという。

翌日外をみたら、左側から来た津波と右側から来た車が重なり合って7台ほどつみあがり、家から出られなくなってしまった。目の前の教会に行くこともできなければ、家の階段がヘドロだらけになり、玄関の入り口、下駄箱も倒れて戸が開かない。あらゆるものが倒れて出るに出られなくなっていた。それで困っていたところに森分さんが来て、大森さん夫婦を負ぶって階段を降ろし、車で宮古小学校の避難所まで連れて行ってくれたという。「森分先生には本当に助けられた」と語る。その後も森分さんは避難所を毎日見舞ったという。

続けて、教会員にも助けられた。夜になると必要な物資を持ってきてくれた。食事は11日の昼食を取ったきりで、12日の夜まで飲まず食わずの状態だった。その時には小さいおにぎりとペットボトルを夫と2人で分けた。そんなところに「さむいでしょ」と言って教会員が服や食料などを持ってきてくれた。大森さんは「超助けられました」という。

12日と13日の2晩、避難所に宿泊したが、保健担当の人が夫の健康状態をみて、暖かいところに移らないかと言ってくれた。介護が必要な夫はトイレに行くたびにその人に手伝ってもらっていたので、わかってくれた。そこで、14日には千徳のデイサービスセンターへ移れることになったが、移動手段がなかった。丁度別の民生委員が来ていて、自分も民生委員をしていたので顔見知りであり、車で連れて行ってくれることになった。

震災後1週間、そこでお世話になっていた。教会員の車を森分さんが借りてきてくれて、家に帰った。ここから大森さん宅の復興が始まる。もちろんそれまでも家が気になって仕方なかったが、移動ができないのでどうしようもなかった。この頃には教会と連携をはじめていたYMCAのボランティアセンターが、森分さんの紹介で片付けに来る。水やヘドロを被った冷蔵庫、食器洗い機、洗濯機といったものを外に運び出して、床板をはがす。それまで使っていた大事なものを全

注(14) 彼女の被災経験は日本キリスト教団出版局の『その時、教会は―3・11後を生きる』にも掲載されている。あわせて参照いただきたい。

部なくすつらい経験だったという。耐震措置をしていたので、戸棚だけは流れなかった。その中に印鑑や銀行の通帳があって取り出すことができた。

その後、知り合いの工務店の社長にリフォームをしてもらい、6月初めから住むことができるようになった。最初は建て替えようかと思ったが、柱、壁、玄関がしっかりしていたので、改築で済ませることにした。その時有り合わせの応急手当のような材料でやったので、あまりいい材料でないのがやや不満だが、あれから3か月で住めるようになったのだからありがたいという。

・移転への思い

宮古教会は今回の津波を契機として、浸水しなかった西町へ移転することを決意した。それも、ひかり幼稚園と合同で同じ敷地に入り、ひかり幼稚園は認定こども園として新しい歩みをはじめる。宗教と教育の場が一体となって、単に元あった形に戻すのではない復興の姿を見せている。

この移転について森分さんはこう語る。

「この教会はこれまでの歴史を考えると100年に3、4回は浸水する場所に建っている。100周年を超えた教会なので、今後100年を見据えて、幼稚園もあるので子供達が安心できる教会にしなくてはいけないということを思い、教会員に移転の提案をした。

教会員はよく決断してくれたと思う。20~30年に一度浸水するとしても、宮古教会は高齢者の多い教会で、多くの会員にとって次の浸水は関係ないかもしれない。それでも移転を受け入れてくれたのは、自分のことだけではなくて次世代のことを考えてくれたということだ。」

宮古教会は以前から福祉や幼児教育に力を入れてきた。その伝統を踏まえこう続ける。

「子供や福祉に終始携わってきた教会であり、今の宮古教会の使命としては子供達を受け入れる。それと同時にお年寄りに優しい教会であるべき。今来ているお年寄りたちも教会に来ることを喜んでいる。移転しても彼らが同じ気持ちで来られるようにしたい。ゆりかごから墓場までのように、生まれてから死ぬまで安心して来られる場所で、その中心に教会があるといい。」

教会員はどのように考えているのだろうか。役員のお2人にお話しを伺った。大森さんはこう述べる。

「残念な気持ちは確かにあるのだが、終戦後まもなく大きな台風で大洪水が起きた。1階の屋根の下まで浸水した。過去にそうしたことが2回あった。そして、今回の津波がきた。その度にあとが大変。それを考えれば仕方ないかと思う。移転がベストな選択だと思う。今、復興で資材が値上がりして残念だが、今やらなければいけないと思っている。」

北村さんはこう述べる。

「幼稚園を続けていても、地方の私立では成り立たなくなるのはわかっていたのに、認定こども園にする踏ん切りがつかないでいた。また教会と幼稚園が離れていて、教会立の幼稚園であるということが失われていた。移転で信仰と社会的な役割が一致した姿を取り戻すことができる。それが教育としての復興なのだと理解している。これを津波が後押ししてくれたと思う。後ろ向きになれば古いものにしがみつくことになる。宮古の幼児教育は宮古教会が先駆けとなった。その姿を取り戻す。」

こうした意見があるなか、教会員でこの移転に最も感情を動かされたのは**小成道子さん**（1932年生）であろう。小成さんは現在の宮古教会の建物を設計した羽生義三郎牧師の娘で、生まれて間もない1933年に猪苗代から宮古に家族で移住している。

幼少のころ、宮古教会の敷地にある牧師館で生活してきた彼女の人生は、まさにこの教会の苦難の歴史と共に歩んできたようなもので、

生き証人である。戦時中はキリスト教への風当たりが厳しく、羽生牧師一家以外は礼拝に来ないという状況におちいった。また、１９４７年９月にはキャサリン台風、１９４８年９月にはアイオン台風で浸水したりといったことを、昨日の出来事のように覚えている。

小成さんの話を要約すると、キャサリン台風は床上２、３センチメートル位で、大きな被害はなかったが、アイオン台風の時にはピアノやオルガンにも被害がでた。当時は教会の敷地で幼稚園もしていたが、台風なので子供達は来ていなかったので、人的被害はなかった。

特にアイオン台風の時は被害が大きく、室内の１メートル以上浸水し、椅子も町の中に流れ出したという。羽生牧師は小成さんの弟に聖書を守ってくれといい、弟は泳いで取りに行った。聖書を濡らしてはいけないので、ちょうど浮いていた茶箪笥を船のようにして教会の２階に避難した。当時、この辺りで２階建の建物は少なく、近所の人達も教会に避難しに来ていた。

父の設計した教会を取り壊し、移転することについて小成さんはこう語る。

「悲しい。１歳からここで育っているので、愛着があります。音響もいいです。しかし、移転は仕方がないと思っています。壁の中にもヘドロが入っていると言われていて、変な愛着は捨てなくてはいけないでしょうね。でも、本心では永遠にこの教会を残してほしいと思っているのです。

この教会は私の故郷みたいなものです。今住んでいる家で祈ることと、この教会で祈ることは別のことのようで、教会で祈るとともこころが安らぎます。ただ、教会であればどこでもいいというものでもなくて、この教会で祈るから安らぐのです。私にとってこの場所はとても特別なものです。よその教会で祈るときにはなんとなく緊張するのですが、ここでは安らぐ感じがするのです。」

小成さんにとって、宮古教会は苦楽を共にしてきた人生の相棒ともいえるような、愛おしい教会である。それでも、彼女は移転に賛成し、反対することはなかった。教会を津波の来ない安全なところに移転すること。幼稚園を認定こども園にすること。そうすることで森分さんのいう、生まれてから死ぬまで安心して来られる場所で、その中心が教会だというその思いを、教会員も共有し、そして強い思いとなっていることがみてとれる。心と教育の復興に向けて、この教会と幼稚園がしようとしていることを記録にとどめておきたい。

おわりに

近年、宗教社会学では宗教の社会貢献についての研究が進められている。（櫻井２０１２年等）。本章で見てきたように、今回の震災の際に、宗教は社会の中での資本としての役割を果たし、他の団体では果たせない社会貢献を行ってきたと評価できる。

宗教的な意味では慰霊、復興支援という意味ではボランティアや支援物資の組織的派遣、ケアという意味では傾聴活動といったものは、各教団に共通したものであった。

特筆すべきは、内外のネットワークの仲介をしたという点である。宮古の宗教施設は、ここで見てきたように相当数のボランティアを受け入れ、その宿泊場所として機能した。受け入れ人数を示してくれたＹＭＣＡやコミュニティ・チャーチはそれぞれ数万単位の人を受け入れている。それ以外の教団もこれに近い人数の受け入れをしていたとみてもいいだろう。元々宗教施設は大人数が集まるようにできていることが多く、多くの人が宿泊できる広い土地と施設、大量の料理を作れる炊事場など、ボランティアセンターとして必要なものを兼ね備えている。『朝日新聞』２０１１年４月４日付によれば、岩手県は県外からのボランティア受け入れに際して、宮城県に比べ受け入れ態勢が整っていないことが指摘されている。その原因に宮城県は中心都市仙台が沿岸にあるのに比べて、岩手は盛岡が内陸にあり、沿岸部には交通、宿泊の面で限界があったということである。そのためか岩手県のボランティアの受け入れは、２０１１年３月末までに宮城県の６割ほどで

写真９　日本基督教団宮古教会の新会堂内部、聖卓、椅子、オルガンといったものから、聖壇横の柱まで旧会堂から持ち込まれた。　2015/12/06　撮影：藤野陽平

写真８　日本基督教団宮古教会の新会堂（手前）と認定こども園宮古ひかり（奥）
2015/12/06　撮影：藤野陽平

あった。記事によれば、受入がままならず、ボランティアを断った市町村も少なくないそうだ。このように見てみると、一つの施設で数万人のボランティアを受け入れた、宮古の宗教施設の重要性がより際だってくる。宗教の場の開放がなければ、宮古で活動した県外からのボランティアの数はさらに少なくなっていただろう。

また、被災、支援だけではなく、日本基督教団宮古教会のように、次の時代を見据えた宗教による復興の姿もみることができた。新しい教会ができて間もなくの２０１５年12月６日に、訪問した際に何人かの方に話を伺った（写真８、９）。小成さんのように「まだ慣れていないのでよくわからないが、すべてが一回りずつ小さくなった。なんだかさみしい」という素直な感情を吐露された方もいた。大森さんは「落ち着いた。前の会堂の部品も新しい会堂に利用しているので、

写真 11　起工式の際にヘドロを被った古い石の上に新しい石を１人１つずつ積んでいく。
2014/11/15　撮影：藤野陽平

写真 10　日本基督教団宮古教会の新会堂に持ち込まれた旧会堂の記念品
2015/12/06　撮影：藤野陽平

引き続いている感じがする」という。確かに聖卓や椅子、オルガンといったものの他にも看板や表札、定礎など旧会堂から持ってきたものがある。これらを新会堂内に目に見える形で配置してある（写真10）。最たるものとしては、聖壇横の柱は旧会堂で使っていたものをそのまま持ってきたものだ。そのように考えると、２０１４年11月15日に行われた起工式の際に、旧会堂付近のヘドロを被った石を新会堂建設予定地に運び、その古い石の上に、新しいレンガを全員で載せていくというイベントが行われたことが思い出される（写真11）。まさに伝統・被災の先の復興を思わせる象徴的なセレモニーであった。

２０１５年12月24日にはクリスマスイブ礼拝が行われた。ここでは聖卓を取り囲むような形に丸く椅子を配置しての礼拝であった。これは聖卓が前、会衆は後ろという聖俗が切り分けら

れる形ではなく、一体であるという神学的発想がベースになって、役員会から提案されたものだそうだ。会員の中には、震災直後に礼拝が行える状況ではない際に、椅子を丸く並べて祈ったときのことを連想した人もいたようである。牧師の森分さんはそういった理解も排除せず、両方の考えを意識しながら考えたという。まさに100年を超える教会のもつ伝統の上に、被災という経験があり、その先に新会堂と認定こども園という新しいチャレンジが位置づけられている。ここに復興というものの一つのあるべき姿が現れているのではないだろうか。伝統やこれまで行ってきた慣習といったものを無視して、単に新しくすればいいというものではない。震災の前と後とで時間が区切れているのではなく、両者は連続している。元に戻すのでもなく、新しくするのでもない、震災経験を起点とした将来の復興の姿を模索していくべきであろう。

【参考（引用）文献】

高倉浩樹、滝澤克彦編『無形民俗文化財が被災するということ　―東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』2014年　新泉社
藤野陽平、平野直子「大変動の中の国際宗教　―中東政変と東日本大震災を軸として」国際宗教研究所編『現代宗教2012』2012年　秋山書店
宮古市教育委員会編『宮古市史（民俗編）上巻』1994年　宮古市
稲場圭信『利他主義と宗教』2011年　弘文堂
金子昭『驚異の仏教ボランティア―台湾の社会参画仏教「慈済会」』2005年　白馬社
「東日本大震災における台湾・仏教慈済基金会の救援活動：釜石市での義援金配布の取材と意見交換から」『宗教と社会貢献』1／2　2011年
櫻井義秀「まえがき　―社会に貢献する宗教の比較社会・文化学」櫻井義秀、浜田陽編『アジアの宗教とソーシャルキャピタル』（叢書宗教とソーシャルキャピタル1）2012年　明石書店
「震災と原発の被災者に宗教者がこれからできること」『月間住職』23　2014年

【資料（聞き取り）】

池田勝一「3・11大地震と盛岡YMCA宮古ボランティアセンター　―二〇一一年五月～二〇一二年三月」『自立と共生を目指して　―盛岡YMCA三十年の歩み』2013年　盛岡YMCA
大谷昭雄「宮古ボランティアセンター2012年度の活動　2012年4月～2013年3月」『自立と共生を目指して　盛岡YMCA三十年の歩み』2013年　盛岡YMCA
大森桂子「夫と共に九死に一生を得て」『信徒の友』編集部編『その時、教会は　―3・11後を生きる　証言2011年3月11日とそれに続く日々』2012年　日本キリスト教団出版局
『日本慈済世界』2012年3月15日特別号（東日本大震災見舞金配布特別号下巻）
木田泰之「若い力で宮古の未来を拓く　2013年」『自立と共生を目指して　盛岡YMCA三十年の歩み』2013年　盛岡YMCA
森分和基「心からの笑顔を取り戻すまで」『信徒の友』編集部編『その時、教会は　―3・11後を生きる　証言2011年3月11日とそれに続く日々』2012年　日本キリスト教団出版局
中原眞澄「東日本大震災と宮古ボランティアセンター　―設立経緯とその意味」『自立と共生を目指して　盛岡YMCA三十年の歩み』2013年　盛岡YMCA
日本基督教団宮古教会『日本基督教団宮古教会百周年記念誌　1909年～2009年』2009年　日本基督教団宮古教会
URL
盛岡YMCA　http://www.ymcajapan.org/morioka/

第2部　各分野での震災後の取り組み
第12章　外国人の被災経験

藤野陽平

はじめに

地縁血縁があり、文化も言語も共有している日本人であっても多くの困難を伴った東日本大震災の経験であるが、外国から移住し、文化的に異なる習慣を持っている外国人ともなれば、その困難さは格段に上昇することは想像に難くない。

特に言語上の問題は、時に生死を分ける重大な情報にアクセスできるかどうかの鍵となる。後述するが、宮古に暮らす外国人の多くが、津波警報の放送を理解できなかった。当時日本人でもあの放送はよく聞こえなかった、何と言っているのか聞き取れなかったという声を耳にする。しかし、日本人の場合には単に音として聞こえないという問題で、外国人の場合鮮明に聞こえたとしても理解できないこととは次元が違う。そもそも、どれほど日本語について学習しても、大地震が来た時のこと、津波が来た時のことを想定してトレーニングしている人は当時はごく少数だったであろう。日常生活の中で聞きなれない単語が飛び交い、大きな揺れ、津波、停電、断水といった初めての事柄とあいまって、その経験は想像を絶するものだったと考えるべきである。

言語に加えて文化的差異も少なくない。個人差はあるとはいえ、非日常の空間に放り出された時の反応は、往々にして文化によって左右される。真偽はともかくとして、「日本人は泣かない」、「災害時にも列を作って待っている」、「東北人は我慢強い」等のフレーズを当時耳にされた方が多いのではないだろうか。外国人にはそれと逆のことが起きていたのである。文化的差異のある少数者の場合、1人だけ周りの人と違う行動をしてしまいかねない。それはあまりいい結果を生むものではないだろう。

グローバル化や国の観光立国の政策の中で、訪日する外国人の数は今後も増大することが見込まれる。それは宮古も例外ではない。国籍や出自を超えた交流がすすむ中、ここでは宮古に暮らす外国人の被災体験を振り返ることで、大災害や日常における外国人との関わり方について考える情報を提供したい。

1　宮古に住む外国人

東日本大震災が発生する直前の２０１０年12月31日の時点で、宮古には１６０人の外国人が暮らしていた（平成23年度版『宮古市の統計』宮古市総務企画部総務課統計担当、17頁より）。総人口６万０３２８人の０・26％ほどなので、全国平均の１・67％と比較しても少ないのだが、外国人も宮古に暮らしていたことに変わりはない。

被災状況に関して、岩手県国際交流協会が把握している限りでは、外国人の死者は岩手全体で5名、宮古市内は1名だった。国際結婚した中国人とのことで、一旦避難所に行ったようなのだが、日本人たちが貴重品などを取りに帰るのをみて、自分も戻ってしまい、被害に遭ったという。

盛岡の岩手県国際交流協会主査の川村央隆さんによれば、外国人の被災経験のなかでいくつか問題になったことがあるという。第1にパスポートの問題である。その人が日本に帰化している場合には問題ないのだが、そうでなければ津波や火災でパスポートを紛失してしまうと出国できなくなる。国によっては再発行に膨大な手間と時間がかかる。第2に日本籍を持つ配偶者が被災して亡くなった場合である。この場合、基本的に在留資格が失われる。川村さんは外国人をめぐる制度が通常時のみの設計になっており、災害時のことが想定されていないと指摘する。

また、オーシャンズ宮古国際交流倶楽部事務局長の**佐々木匡人さん**（１９６２年生）によれば、中国人で放射能が怖くて盛岡まで歩いて逃げようとして途中で警察に保護される人がいたり、放射能が恐くて1人で一時帰国したルーマニア人が、そのためにその後家族との関係に問題が生じてしまうということがあったという。また中国人を中心に

震災後の離婚も多発した。文化的な差によるすれ違いが発生したり、避難先の家族との折り合いがつかなかったりした。

岩手県国際交流協会としては、当初から盛岡以外の場所にも行って情報収集をしたかったが、ガソリンがなくどうしようもなかった。1週間ほどでバスが動いたので、宮古へ職員を派遣し、水産加工のために来ている中国人研修生などに会うことができた。避難所のリストをみて外国人の名前があると会いに行ったが、雇い主の企業は研修生を外部の人に会わせたがらず、困難もあった。また、宮古は札幌領事館が管轄なので、彼らに連絡先を教えるなどの行動をとった。

2　外国人の被災経験

ここでは実際に宮古に暮らす外国人の被災経験を紹介したい。なお、岩手県在住外国人の被災経験については、公益財団法人岩手県国際交流協会も小冊子を発行している（公益財団法人岩手県国際交流協会2013年）。あわせて参考としてほしい。

・タイ出身で千徳在住、来宮20年の**中井カンジャナーさん**（1971年生。みなさんからメイオさんと呼ばれているので、ここでもメイオさんとさせていただく）とは、後述するオーシャンズ宮古国際交流倶楽部の世話人の1人高橋洋子さん（1956年生）に同席いただいて、2015年2月20日にマクドナルドにてインタビューを行った。

彼女のメイオという名だが、タイ語の語感では猫の鳴き声のようで、日本語では「ニャー」とか「ミャオ」にあたる。小さい時からそう呼ばれているので、本人も本名よりもこの名前の方がしっくりくるという。ダンサーとして来日し、広島、山口と半年ずつ店を回り、ビザが下りて、来宮した。どこへ行くかは仲介の会社が決めるので、メイオさんが自分で宮古を選んだわけではない。その後宮古で日本人と結婚し、現在6人家族（義父、義母、夫、高校生の息子、中学1年の娘）で暮らしている。

メイオさんにとって宮古の第一印象はあまりよくなかったようだ。彼女はタイの首都バンコク生まれ、にぎやかな首都からやってきて、宮古はさみしい場所とうつったようだ。「いっぱい泣いた。言葉がわからないのが、一番つらかった。」と当時を回想する。タイではバンコクの会社で働いていたのだが、日本のテレビドラマで着物を着ている人をみて、それに憧れて来日を決意したという。

しかし、彼女の日本イメージは、20年前のテレビで見知っただけの偏ったものだった。日本の空港に着いて、日本人がタイの人達と同じように洋服を着て、だれも和服を着ていないことや、忍者もいないことにショックを受ける。それほど彼女は日本のことを知らなかったし、日本語もできなかった。

日本語は宮古に来てから昼間は働いて、その中で話し言葉を覚えた。去年の6月から読み書きの勉強をはじめた。その前もオーシャンズで少し学んだことがあるのだが、子供がいるので夜の時間の参加は難しいという。

このインタビューの内容全てを日本語で説明できるほどの日本語会話能力で、うまいといえる。実際、頭のなかで考えている言葉も日本語だという。ただし、書き言葉は苦手で、ひらがなは覚えたが、カタカナはまだ覚えていない。そのため、役所の書類などを、1人で処理することはできないし、英語版があってもタイ人である彼女は英語も得意ではない。

彼女の震災体験に話を移そう。津波の時には1人で駅前のキャトルにいた。まず揺れて、地震はとても怖かった。周りの人達が宮古まで津波が来るといっていること、防災無線で「津波が来るから逃げてください。海から離れてください」と理解でき、海の近くではないので大丈夫だと思ったという。

当然、津波を見たことがなくとても怖かったので、そのまま車で帰宅した。水道も電気も止まっていた。家にいてはテレビが見られないので、車のカーナビのテレビを見た。手足が震えて、頭がぼーっとしてくる感じがして、気分が悪くなった。全てが初めての経験だった。1週間くらい体調が悪く、食欲もなかった。その後、テレビでなあど

が波にのまれるのをみて、さらに恐怖心に襲われた。それまでも怖かったが、映像で見てからの怖さは格段に強いものだった。そのため津波の後、半年はずっと家に引きこもっていた。

被災後の生活については自宅が千徳なので、大きな問題はなかった。自宅には普段から麺や米を大量に買っていたため、備蓄があった。備蓄がない人もいるので、急ぐ必要のない自分は商店で並んでまで買わず、ドラで必要な人のために服を集めていた時には、もっている服や靴を全部提供した。ただし、全て提供してしまったので、今度は自分の着るものが足りなくなったと苦笑する。

家族にもすぐに会うことができた。義母は家にいたし、義父はオートバイで帰ってきた。夫は駅にいたが、地震が大きかったので津波が放送より大きいものが来ると直感して、すぐに仕事をやめて自宅に戻ってきた。子供達は学校にいた。ガソリンは義父がオートバイを持っているので、買いに行ってもらった。1人千円までというので、缶に入れてもらってきた。水は畑仕事用のボトルに入っていたのでそれを使った。電気や水は2日ほどで復旧した。

メイオさんの被災経験のなかで独特なのは、心霊経験をしたことである。自宅の近くに遺体の安置所があり、最初はわからなかったが、そのことを知るに至り、幽霊をみるようになる。日本に来てからは少なくなっていたが、元々、霊感が強い方で、タイではよく何か不思議なモノを感じることがしばしばあった。タイの僧侶から聞いていたのは、死人は自分が死んだことに気が付かないので、霊が徘徊するのだという。それで、近所に安置所があると知ってから、人がペタペタと裸足であるく音が聞こえるようになった。特に夜に、窓側で寝ているとペタペタと歩く音がしばしばした。また、お盆には肉が腐った臭いとヘドロが混ざったような臭いも感じている。津波で流され亡くなった人の体から出る臭いということであろう。こういう時にはタイ語と日本語でお祈りするとその霊はいなくなったという。また、弟がタイでお守りを2つ買ってきてくれたので1つを窓に付け、もう1つは夫の車につけている。これで日本人の夫も体調がいいという。それまで夫は寝ていると苦しそうな息をしていた。

被災地で、いわゆる心霊現象が広く報告されている（高橋２０１３年）。こうした問題には時に宗教的なケアが必要となるが、外国人となるとその人の文化的、宗教的背景の理解も必要となってくる。それでいて、心霊体験のケアは長く続く心的復興には必要なことである。ここでは問題提起にとどまるが、大きな問題を孕んでいる。

最後に自分の着るものがなくなってしまうほど衣服の提供をした彼女の行動をみると、支援されるばかりではない外国人の姿が浮かび上がってくる。次節に登場するポールさんたちもボランティア活動を行っているし、世界中から支援の輪が広がったことは周知のことである（藤野・平野２０１２年）。被災地に暮らす外国人は困難が大きかったのは間違いない。しかし、外国人＝弱者＝お荷物ということではないことをここに記しておく。多様な人が協力し合って困難に対処していくシステム作りが待たれる。

3　身を寄せ合った外国人たち

宮古には外国人同士が身を寄せながら震災後の数日を乗り切った人達がいる。ここではそうした人たちの経験を述べておきたい。まず登場人物の紹介をしよう。

・ポールさん（Paul Dixon さん　イギリス人、28歳、２０１３年11月1日、マクドナルドにて英語でのインタビュー）

マンチェスターの東方、車で2時間ほどのスカンソープ出身で、２０１０年4月に来日した。最初は山田町にいたが、6か月後に宮古に移住した。愛宕に住んでいて、震災後に八木沢に移った。来日の動機として、日本文化を体験したかった。外国に住んで、新しい体験をし、英語を教えてみたかったことをあげる。アジアに興味があり、いい仕事といい学校を見つけられたと感じている。宮古に来た理由は仲介の会社が岩手を選んだからだ。来宮して5年になるが、２０１５年3月には横浜へ行くことになっている。

今は月曜から金曜日まで宮古商業高校、宮古水産高校で英語を教え

ているが、来日当初は山田高校、宮古工業高校で教えていた。「生徒たちはみんな元気でハッピーだ」というポールさん。残念なのは津波の後、山田で教えられなくなったことだという。地震当日は部屋の引っ越しのため田野畑にいるビクターさんのところに2週間ほど身を寄せる予定だった。

・ファトマさん（インドネシア人、２０１２年９月21日ご自宅にてインタビュー）

ジャカルタ出身で、来日25年になる。インドネシアで日本人の夫に出会い、結婚のため来日し、横浜で生活していたが、夫が仕事を辞めて独立するために来宮した。本当は東京に居たかったが、夫の夢を応援するためにやってきた。仕事は夫の手伝いで営業を担当している。

「日本に住むのだから日本のことを好きにならないといけない。外国人が永く日本と付き合っていくためには、日本に合わせないといけない」と考え、生け花を習い、小笠原流の師範の資格を取っている。現在の家には2つの建物があり、1つを外国人たちが集まる場所として使っている。震災で、友人を5人亡くし、親戚には家が被災した人もいる。「津波のことは死ぬまで忘れられない。まるで戦争の様だった」と当時をふりかえる。

・エミーさん（フィリピン人、１９７０年生、２０１５年2月19日、マクドナルドにてインタビュー）

マニラの西方ラグナ出身のエミー・ナカジマさんは、北上で出会った男性と結婚するために宮古へ移住し15年となった。その前は北上に10年住んでいた。もはやフィリピンより日本での生活の方が長くなった。夫と2人の子供の4人家族で暮らしている。エミーさんは今回の津波で4人の知人を亡くしている。しばらく見つからなかった人や、今も見つからない人もいるので、カトリックの教会で祈ったという。災害時に教会で自分の言葉タガログ語で祈ったりすることは「気持ちがいい。心から感激する」と語っている。

・アニータさん（ナミビア人、１９７０年生、２０１５年2月23日、マクドナルドにてインタビュー）

首都ウイントフック出身の佐々木アニータさんは来日17年。船員の夫と故郷のウイントフックで知り合った。夫は船に乗っていると3、4か月帰ってこないので、家にはアニータさんと子供だけのことが多い。子供は中学3年生の息子、中学1年生の娘、8歳の息子の3人だ。日本語、英語、アフリカーンス語ができる。ナミビアは１９９０年に南アフリカとともに独立し英語が公用語となった。今は日本語が一番得意で、アフリカーンス語は使わないから忘れていく。崎山の古里在住。となりに義父母が住んでいる。

地震発生時

3月11日午前中、オーシャンズの仲間たち5人で、その日の夜に宮古を離れる予定のオーストラリア人英語教師ミッシェルさんの部屋の片づけを手伝っていた。地震が来たのはその後に市内のレストラン、トマト&オニオン 宮古店（通称「トマオニ」、写真1）にて送別会を行っていた時だった。参加者はエミーさんの記憶では7、8人だったという。会計の時（ファトマさんによれば食事が済んでおしゃべりをしている際）に揺れ出して、揺れがおさまるまで慌てて外に出て、みんなで手をつないでいた。地震のないフィリピンから来たエミーさんは、あまりの怖さに泣き出してしまう。また、小学生の子どものことが気になり、頭のなかはそのことで一杯になり、建物が壊れてないだろうかなどと心配し、ショックで歩けなくなってしまった。

この中で最も日本語が不得意なポールさんは、防災無線が日本語なので「ツナミ」しかわからなかった。「ＢＡＲＡＢＡＲＡＢＡＲＡ、ツナミ、ＢＡＲＡＢＡＲＡＢＡＲＡ」という感じに聞こえたという。ポールさんは当時を振り返って言語が一番の問題であったと語る。

「日本語がわからないこと。これが最大の問題だった。多くの人が心配してくれたが、何を言っているのかわからないからどうしようもなかった。

写真１　送別会が行われていた「トマト＆オニオン」
2014/12/07　撮影：藤野陽平

津波の警報も日本語の後に簡単な英語のメッセージをつけてほしい。〝TSUNAMI!（津波）Becareful!（注意）Earthquake!（地震）Evacuate!（避難）〟といった単語だけでもつけてくれればいい。どのくらいの大きさとかはあればいいけど、なくても構わない。簡単なメッセージだけでも状況が把握できる。英語の教員の中には僕より日本語ができない人がたくさんいる。もし、もう一度津波が来た時に、彼らが1人でいたら何もできないだろう。」

ただし、日本に長く滞在し、すでに日本語が上達している人でも、これほどの大きな地震や津波の経験はないので、事態を正確に把握できるということでもない。例えば日本語の上手いエミーさんでも、津波が来ることをすぐに理解できたわけではない。防災無線もなっていたし、ラジオも聴いていたが、理解できなかった。英語でも「津波」は〝tsunami〟なので、単語は知っていたが、それがどの程度深刻なのかは知らなかった。ファトマさんも津波警報はただ「避難！避難！」以外、何を言っているのかわからなかったという。

なお、エミーさんは毎週金曜日の10～14時に釜石で英会話のレッスンをしていて、本来ならば、津波の時に海沿いの道を走っているところだった。しかし、この送別会のために休みにしていた。エミーさんは「ミッシェルさんに助けられたようなもので、感謝しています。運転をしていると地震の揺れはわかりにくいので、何もわからないまま急に津波にのまれていてもおかしくありません」と振り返っている。

崎山小学校へ

なんとか日本語の上手い人達が、災害放送やラジオで津波の情報を得て、ビクターさんとケビンさんの2台の車に分乗して、高台にある崎山小学校へ移動した。エミーさんも車で来ていたが、ガソリンがあまり入っていなかったのと、ショックで歩けなくなってしまったので、彼女の車は駐車場においたままにした（その後、1週間ほど置きっぱなしだった）。津波のことは聞いていたので駅の裏の道は通らずに、橋を渡りキャトルを右に曲がり駅前を左に曲がり、山の中の道を移動した。ポールさんは「日本語のわかる友人といたのはとてもラッキーだった。1人でいたらアナウンスは日本語だけで意味がわからず、愛宕の自宅に帰っていただろう」という。（ポールさんの部屋は2階で無事だったが駐車場に停めていた車は流されてしまった。）

エミーさんの子供は当時崎山小学校4年生の女の子と、2年生の男の子で、そこで会うことができた。アニータさんの子どもも同じ学校で、そこで「トマオニ」にはいなかったアニータさんと会うことになる。小学校では泣いている子供達も見かけた。

アニータさんは「トマオニ」でのパーティには親戚の三十三回忌があり参加していなかった。エミーさんからは「終わったら来て」とさそわれていたが、断っていた。法事はおじちゃんの親戚の家で行われたが、昼までには帰宅し、地震の時には自宅にいた。そして、津波でそのおじちゃんが流されてしまった。法事に参加したのはアニータ、義母、義祖母、おじちゃんの4人だった。おじちゃんはまだ見つかっていない。まさか午前中に会ったばかりの人だったので、信じられなかった。おじちゃんは漁師だったので、船をあげようと浜におりてしまった。同じ場所で漁師12人が流され、助かったのは3人だけだった。

地震の時には自宅にいて、下の子どもを保育園に迎えに行く準備をしたり、パソコンをしていた。揺れ始めて、電気が消えて物が落ちてきたので、外に出た。となりのおばあちゃんのところに行ったら、津波が来ることをラジオで聞いた。おばあちゃんの家も物が落ちて壊れていたので、それを片付けながらラジオを聞いていた。防災無線も鳴っ

ていてとても恐かった。

崎山は保育園、小学校、中学校が同じ場所なので、地震の後10分くらいして車で迎えに行った。当時、長男は小学校6年生、一番下の子は保育所にいた。そこでみなさんに会うことになった。

アニータさんのお宅へ

ここでトマオニにいたグループが自宅を避難所として提供するアニータさんと出会う。アニータさんは一旦子供を連れて家族だけで自宅に戻った。そこに元々アニータさんと仲良しだったエミーさんが、避難してきた。エミーさんの自宅は佐原にあり、アニータさんの家から5キロほど離れている。エミーさんは犬を2匹飼っていて心配になり、夜9時ごろビクターさんに送ってもらって自宅に戻った。しかし、夫が帰宅していないので不安になり、再びアニータさんの家に戻る。当日は寒い日で自宅は電気もつかずとにかく寒かったという。

当時のアニータさんは子育てのためオーシャンズにはあまり参加しておらず、エミーさん以外の人とそれほど仲が良かったわけではなかったが、この時に他の人達とも仲良くなった。この時に来たのは、ポールさん、ミッシェルさん、ビクターさん、ケビンさん、ファトマさん、エミーさん、アレックスさんで、ポールさんとミッシェルさんは愛宕、ビクターさんは田野畑、ケビンさんは市内在住のため、この4人が帰れなくなってしまった。

当日、ファトマさんが津軽石の自宅と家族を心配し、パニック状態になってしまったので、ビクターさんとポールさんとで車をつかい家まで送りにいった。彼女の家までは普段は海沿いの道で行くが、通れないので290号を通って山の中を走った。おかげでファトマさんは無事帰宅できた。彼女の夫もとても心配していたという。ファトマさんを家まで送ったあと、ポールさんは同じく山中の道を使ってパスポートなどの重要な書類を取りに自分のアパートに戻り、アニータさんの家に戻った。アニータさんの夫はタンカーの船員で茨城におり不在だった。大きいタンカーだったので問題はなかったが、3日ほど連絡が取れず心配だったという。

エミーさんの夫は山田町の大沢で水道関係の自営業をしていた。震災後会えたのは2日後の12日夜11時で、もうダメかもしれないと覚悟を決めていた。話を聞くと車が壊れて帰ってこられなかったのだという。夫と再会したエミーさんは子供達と自宅へ帰っていった。

アニータさんは普段は土曜日に買い物をするのだが、金曜日に地震が来たので食品の備蓄がなかったところに、急に人が増えてしまった。そのうえアニータさんの家族はみんな魚が好きだが、外国人はあまり好きではない人も多く、せっかく出したのに食べない人もいた。それでも、なんとかやりくりしたという。帰宅したエミーさんが自宅から食べ物を持ってきてくれたこともある。

水道と電気もなかった。発電機はあったが、ガソリンがなくなるといけないので夜だけ使った。水は2日目に給水車が来たが、水と電気が復旧したのは1週間ほどかかった。飲み水はタンクがあったので良かったが、洗濯や食器洗いは山に水を汲みに行って使った。この間、ボランティアで道路の清掃などをしたり、徒歩で買い物に行ったりして過ごしていた。ポールさんは一度自宅に戻り部屋の掃除もした。

この時のエミーさんは、電気は2週間ほどつかなかったのだが、夫が水道関係の仕事なので発電機があり、それで暖も取れたし、食事も作れた。また、水は隣に住んでいる義父母の家の裏に井戸があり、発電機でポンプを動かしてつかった。ただし、節約のためお風呂は2日に1回にした。

大変だったのは食料だった。普段は家にある事が多いのだが、「トマオニ」のパーティが終わった後に買い物に行くつもりだったので、備蓄があまりなかった。助かったのは義父の家には畑があり、野菜がたくさんあったことで、じゃがいもと白菜でしのぐことができた。米もいつもは30キロくらいあるのだが、この時は5キロくらいしかなかったので、義父の家にあった素麺やパスタ、ラーメンを食べたという。肉や魚は2週間食べられなかった。自分の家にあった食料はたくさんの人が泊まっていたアニータの家にも持っていった。そうはいっても、携

帯電話も通じなければ、ガソリンもないので毎日行き来できるわけではない。夫は車を2台持っていて、1台は家にあった。自分の車は「トマオニ」に泊めてあり、パーティの後給油しようと思っていたので、ガソリンが入っていなかった。

ポールさんは友人のａｕの携帯電話を使用して家族に無事の連絡をした。その時はａｕだけが使用できた。ポールさんの記憶とは、ずれがあるが、エミーさんが使用しているａｕの携帯電話は通じるまで1週間くらいかかった。固定電話はしばらく使えなかった。フィリピンの家族と連絡ができたのは10日後にインターネットが復旧してからだという。アニータさんも電気・水・食べ物の問題よりも、最も困ったことは外国の家族や夫と連絡が取れなくなってしまったことだった。

日本人の安否確認もなかなか難しい状況であったあの当時、宮古に暮らす外国人の母国の家族や友人たちはどういう気持ちでいたのだろうか。災害時の海外への連絡手段は彼らに共通の問題であった。

その後

途中で帰宅したファトマさん、エミーさん以外の人達は5日間アニータさんのお宅に滞在したが、ずっとそこにいるわけにもいかず、5人で岩泉に移動することを決心した。エミーさんの夫の友人が中古車を扱っており、その人がガソリン1缶を分けてくれた。エミーさんは半分を自分でとり、半分はビクターさんにわけてあげた。これでとりあえずのガソリンができた。それまではガソリンがなく、車は緊急用としてほとんど使わないでいたが、移動することを決意して車を使用した。沿岸の道は通れないので、山中の道を移動した。岩泉にはガソリンがあるという噂があったからなのだが、行ってみたところが単なる噂で、ガソリンはなかった。

その後5人のうち3人は花巻空港の近くまで移動した。ポールさんと岩泉の友人は岩泉に残ることにした。しかし、その友人は両親と連絡を取ったところ福島の原発の事故のため、すぐ日本を離れろと言われ、先に花巻空港の近くへ移動したグループの元に行ってしまった。

ポールさんは一時、独りになってしまったが、ビクターさん達が戻ってきてくれた。しかし、ガソリンはほとんど空で移動ができなくなってしまう。幸い、2日後に岩泉にガソリンが届いたとの知らせをうけ、ガソリンスタンドへ行こうとしたが、途中でついにガス欠になり、手でおして行って給油したという。その後、数日間、避難所で料理の手伝いのボランティアをし、ガソリンが手に入ってポールさんの会社が取ってくれた盛岡のホテルへ移動し、3人で暮らした。数日後ケビンさんとビクターさんは自分のアパートに戻っていった。

4　背景としてのオーシャンズ宮古国際交流倶楽部

オーシャンズ宮古国際交流倶楽部（以下、オーシャンズ）は、ボランティアで運営されている、宮古市内唯一の日本人と外国人が集い交流する場である。国際化が進むなか、多くの地方公共団体には国際交流に関する部署が役所に用意されているが、宮古市にはこういったサービスを提供する部署が存在していなかった。そこで事実上、窓口になっているのがオーシャンズだった。そもそも、筆者も宮古の外国人について取材しようとした際に紹介されたのが、オーシャンズであった。事務局長の佐々木匡人さんは、オーシャンズに集まる外国人の特徴を「ゆるやかなつながり」と考えている。このゆるやかなつながりゆえに、前節の共同生活が成立したといえる。

オーシャンズは２０００年3月14日より活動をはじめている。日本語教室をはじめた理由は、佐々木さんの近所のフィリピン人が離婚して帰国してしまった。中国人でも似たようなことがあった。その理由に日本語のコミュニケーションの問題があることがわかってきた。しかし、宮古には外国人のための窓口もなく、特に対策をしてくれない。そこで、佐々木さんは日本語教師の資格を持っていたので、日本語教室を始めることにした。当時の参加者は外国人の英語教師が中心だったが、近年は様々な経緯で宮古に暮らすようになった人達が集まってきている。発足の際には「三陸海岸の中心都市　宮古にも国際交流の拠点を！」と呼びかけた。

写真２　オーシャンズのハロウィンパーティ
2014/10/31　撮影：藤野陽平

活動は毎週木曜日の午後７～９時に青少年センターで行っている。年会費は千円で、青少年センターの使用料などにあてている。その他にもクリスマス、花見、盛岡の祭りへの参加、カラオケ、ハロウィン、春節などのイベントを行っている。子育て中のメンバーも多く、木曜日に参加が難しい場合にはイベントを中心に参加する人もいる。ハロウィンの際には仮装してカラオケをしたり（写真２）、春節には各自持ち寄りの料理を食べたり（写真３）といったようなことをする。オーシャンズとしては市に外国人の対応をしてほしいと要望を出していて、実現できれば、日本語教室は市に任せて、オーシャンズはイベントだけを行いたいと考えている。

震災後、オーシャンズの日本語教室は５月上旬に活動を再開させた。揺れに強い恐怖を感じ、フラッシュバックも続いている人がいると聞いたり、話をする場所が欲しいという要望があり、すぐに再開した。

普段の活動

オーシャンズの日本語教室（写真４）ではどのような活動をしているか見てみよう。筆者が参加した２０１４年10月30日の会では、夜７時から勤労青少年ホームにて参加者は男性６名、女性３名の９名で、うち４名は日本人であった。学習の内容は、まず、佐々木さんの司会で、プリントをもちいて「ばびぶべぼ」と「ぱぴぷぺぽ」の発音の違いを練習する。日本語の母語話者にとっては何でもないが、日本人が英語のＬとＲの違いを聞き分けられないように、日本語の初学者にはこの違いはたやすいものではない。

次にプリントを用いて、買い物の練習をする。コンビニエンスストアやスーパーマーケットでは、言葉がしゃべれなくても買い物はできるが、それだけでは込み入った要求をしたり、店員に問い合わせたりすることができない。日常生活に密着しているが、難しい問題を取り扱っている。

８時頃になると各人のレベルに合わせて個別の練習を行う。日本語能力検定Ｎ２の試験を控えている人には、問題集でわからなかった問題の質問に日本人が答えている。別の人には「ひとつ、ふたつ」のように数字の数え方を教えたりしている。語学教室では基礎から上級のようにクラス分けをするほうが、教える方も、教わる方もやりやすいのであろうが、ボランティアによる運営で、それだけの人材や準備時間を確保するのは現実的ではない。

写真３　春節のパーティ中に広東語の新年のあいさつを練習する　2015/02/20　撮影：藤野陽平

参加者にとってのオーシャンズとは

参加者のみなさんにとって、オーシャンズは宮古で外国人と集まれる貴重な場であり、コミュニティを作る場になっている。エミーさんはオーシャンズにアニータさんに誘われて参加するようになったが、それまではあまり宮古で出歩かなかった。そのうえ、オーシャンズに参加する前には宮古に外国人の友達はいなかった。アニータさんには12、13年前にドラで

出会った。見た目ですぐに外国人とわかったので、声をかけたところ、すぐに友達になれた。2人は子供も同じくらいの年で「ママ友」だ。当初、英語でしゃべっていたが、今では日本語で話す。ただし、メールは英語を使っている。オーシャンズに参加するまでの外国人の友人はアニータさんくらいで、友人は少なかった。高橋洋子さんとアニータさんが友人で、オーシャンズに誘われたそうだ。このように人づてのネットワークが形成されており、細々とではあるが、しっかりとした人間関係が構築されている。

それでは彼ら・彼女らがオーシャンズについてどのように感じているのだろうか。今回のインタビューのうち、該当する部分を抜粋してみたい。

ファトマさん

「オーシャンズには4年前から通い始めました。佐々木先生はすぐ近くに住んでいて、親戚のように親しくしてもらっています。オーシャンズにも直接佐々木先生から誘われました。オーシャンズに行くまでは国に帰りたいと思っていたのですが、通い始めてからは友達も増えて宮古での生活が楽しくなりました。東京では外国人の集まりも多いですが、宮古にはここにしかありません。佐々木先生がこうした活動をしてくれていることに本当に感謝しています。

仕事や勉強が終わって夜にすることがないのは寂しいので、オーシャンズのような集まりがあると張り合いが出ます。オーシャンズがないと、宮古を離れたくなってしまうかもしれません。メンバーたちは宮古が一番いいと言っています。おかげさまで宮古は私達の故郷という感じがします。

佐々木先生は、私達オーシャンズのメンバーにメールを送るなどケアをしてくれました。震災後、オーシャンズが再開したときにはみんな参加しました。みんなに会うことはとても楽しいです。オーシャンズのような外国人も日本人も集まる場所がとても大切です。これを長く続けてほしいです。外国から来て親戚がいないところではファミリーのような関係なのです。」

写真4　オーシャンズの日本語教室
2015/05/01　撮影：藤野陽平

メイオさん

「オーシャンズには10年ほど前にアニータさんに日本語の勉強になるからと誘われて参加しはじめました。高橋洋子さんとはオーシャンズで出会いました。一時通わない時期もあったのですが、その時も高橋さんとの関係は続いていました。今でも、何か問題があるとすぐ高橋さんに相談します。アニータさんとはドラで買い物をしている時に出会って、それ以来友人になりました。

オーシャンズには今はイベントの時に参加しています。それ以外では高橋さんとは毎日メールをします。最初は事務局長の佐々木さんと知り合いだったので、飲み会の時に誘われて以来参加するようになりました。当時は英語圏の人が多かったので2時間のうち最初の1時間は日本語、次の1時間は英語を勉強していました。娘が中学校で英語が習えるからと一緒に通っていたのですが、高校に入ってからは来なくなったので私だけ残りました。

ただ、オーシャンズにはいろいろな人がいるので、恥ずかしいのです。日本語のレベルもバラバラで、私はまずはひらがなだけ勉強したいと思うのだけど、カタカナや漢字もでてきてしまいます。タイの若い子も来ていて、その子の方が早く覚えてしまい、私はよく間違ってしまいます。それも恥ずかしいんです。」

このようにオーシャンズのような集まりを必要としつつも、シャイな性格のメイオさんは、色々な人が来る場所があまり得意ではないよう

だ。しかし、日本語教室に参加しないからと言って、関係が切れてしまうというわけではないところが、オーシャンズの行き届いている点である。

「昨年6月から12月まで高橋さんのお宅で、お茶を飲みながら、ひらがなの勉強を週2回やっていました。高橋さんがスマホを買ったのを見て、うらやましくなって私も買ったのですが、それを機に日本語を覚えようと思ったのです。勉強の他にも高橋さんと毎日、日本語で練習を兼ねてメールをしています。最初は何が言いたいのかわからなかったけど、少しずつわかるようになってきました。」

シャイな性格のメイオさんだが、高橋さんとは家族のように打ち解けている。そこでオーシャンズの集まりに参加しなくても、彼女や佐々木さんらが個別にケアを行っており、関係性を維持している。

アニータさん

オーシャンズに15年前から通うアニータさんも、同じような経験をしている。

「オーシャンズは15年前から通っています。できたばかりの頃からのメンバーです。しかし、子供ができてから夜に外出できなくなり、その時は高橋洋子さん、佐々木先生、中村さんが週に1回火曜日に我が家に来て、日本語を無料で教えてくれました。このころは日本語がしゃべれなかったのです。こんなに日本語がうまくなったのはオーシャンズのみなさんのおかげです。世界一やさしい人達だと思っています。

日本語の読み書きは漢字が難しいけれど、だいたいできます。子供が大きくなったらまたオーシャンズで勉強したいと思っていますが、今はイベントの時を中心に参加しています。家で英会話教室もしているので、木曜日の夜は参加できないのです。英会話教室は3年前からはじめました。夫の収入で家計は足りていますが、家で何もしていないとストレスがたまります。楽しいことをしているとハッピーです。」

おわりに　「住めば宮古」は誰のものか？

本調査を通じて複数の宮古に暮らす外国人からお話を伺う機会を得た。全員が口をそろえて言うのが、宮古が好きということである。アニータさんはその理由に安全をあげる。

「津波の後、ナミビアの友人は帰ってきたらといいました。しかし、ナミビアは治安が悪いので宮古の方が安全です。安全な国だから日本がいい、宮古がいいのです。ここでは殺されたり、泥棒に入られたりするということはまずないですから。」

ポールさんは宮古で英語が通じないこと、退屈なことに当初は不満を持っていたようである。しかし、人間関係ができていくうちに楽しみを見出し、住みやすい場所であると考えているようだ。

「宮古にはじめて来た時にはとても嫌だった。早く離れたかった。でも、今は自分の家のようなところになった。みんなフレンドリーで助けてくれる。平和な町だと思う。ただ、近くに大きな町があればパーフェクトなんだけど…今はテニスクラブに参加していて、地元の人と接することができる。日本人の友人もたくさんいる。イベントやクラブに参加すれば友達は増えていく。オーシャンズもそういう場所の一つだ。ただ、みんな忙しいのでなかなか会うことができない。昨日のハロウィンパーティでみんなに久しぶりに会えた。だから、オーシャンズの普段の日本語教室だけではなくて、こういうイベントはとてもいい機会、いいアイディアだと思う。」

こう語るポールさんは4時に仕事から帰宅すると、月水金はテニスをし、火曜日は月に2回インターネットで英語を教え、木曜日にはマクドナルドで日本語の勉強、日曜日にはフットサルと毎日充実した生活を送っている。

グローバル化が進み、今後はますます国際結婚の数も増えていくだろう。また、少子高齢化の中で、復興の担い手を日本人だけで賄える時代ではなくなっている。日本中で同じことが起きているが、宮古で

ももっと外国人は増えていくだろう。宮古に関係した人が一度は耳にするであろう「住めば宮古」という言い回しがある。その「みやこ」とは誰のものなのだろうか。宮古を強く愛する外国出身の人達にも、その門戸を開くべきではないだろうか。

その上で、現在オーシャンズがかかえる問題を振り返ってみたい。まず、受講生の日本語のレベルが様々で、来日数十年の人から、日本に来たばかりで挨拶もままならい人までいる。その人達が一つのクラスで学習しているのだから、難しい運営にならざるを得ない。いくつかのクラスに分けられるといいのだろうが、日本人ボランティアの数、参加者数が多くない現状では難しい。そもそも、オーシャンズはボランティアのグループである。何らかの事情で継続できなくなっても何の責任もないし、続けていくことは義務ではない。あまりに負担が大きくなれば、そういうこともあり得るだろう。やはり公的機関が、こうした国際交流の基礎的な部分を担う必要があるだろう。

これはオーシャンズの問題というより、宮古に暮らし宮古を愛する外国人の抱えている問題でもある。次に起きるであろう災害の時に、今回のように、たまたま外国人が集まっていて、力をあわせて乗り越えられる保証はない。彼ら・彼女らの安全を守るためにも、地域のネットワークに受け入れることが必要である。出自や国籍に関わらず、地域のネットワークのなかで、どのようにソトから来た人々と共に生きていくのか、震災後人口流出の止まらない宮古市全体の課題ということもできるだろう。

【参考（引用）文献】

公益財団法人岩手県国際交流協会『岩手県東日本大震災津波　多言語記録集　在住外国人の３・11』２０１３年　公益財団法人岩手県国際交流協会
高橋原「臨床宗教師の可能性　―被災地における心霊現象の問題をめぐって」国際宗教研究所編『現代宗教２０１３』２０１３年　秋山書店
藤野陽平・平野直子「大変動の中の国際宗教　―中東政変と東日本大震災を軸として」『現代宗教２０１２』２０１２年　秋山書店

【資料（聞き取り）】

宮古市総務企画部総務課統計担当編『平成23年度版　宮古市の統計』２０１２年　宮古市
オーシャンズ宮古国際交流倶楽部
http://homepage3.nifty.com/bagusnya/oceans/japanesef.html
公益財団法人　岩手県国際交流協会
http://iwate-ia.or.jp/

【協力機関】

オーシャンズ宮古国際交流倶楽部
公益財団法人岩手県国際交流協会

（付記）２０１６年7月26日に宮古市国際交流協会が設立された。本稿の脱稿がそれ以前であり、この内容を記すことができなかったが、本協会を通じて宮古市における今後ますますの国際交流が進むことを祈念したい。